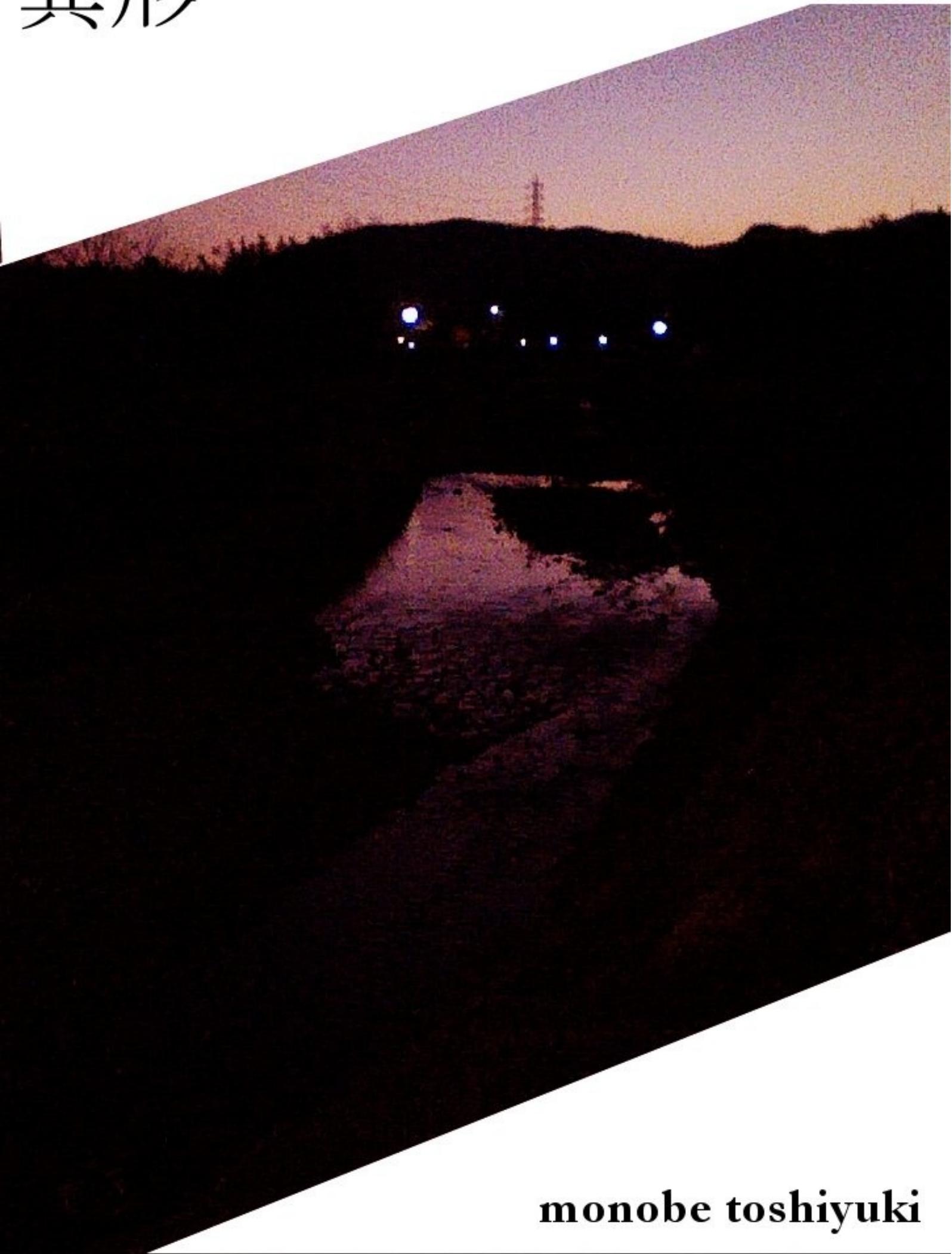


異形



monobe toshiyuki

男は家を離れ、梅林の中にいた。

ひたすら立ち続ける。日が昇り、柔らかな陽光が大気を解きほぐす。肩幅に足を開き、両腕を垂らす。ふと、男の背にした一本の梅の木、その梢に影が浮かんだ。三毛が梢に座り、興味深そうに男を眺めていた。

「やあ、三毛。どうした」

ふっと、三毛の後で男の声が響いた。三毛が慌てて振り返る、何もない空間があるだけだった。

「ここだよ、ここ」

今度は三毛の頭の上で男の声が響いた。驚いて、三毛は顔を上げた。青い空と枝があるだけだった。

三毛の耳元で男の声が囁いた。

「ほら・・・、ここだって」

「う、うわああっ」

三毛が足を踏み外し、梢から落ちる。瞬間、男が両腕で三毛を抱きかかえ着地した。

「はは、びっくりしたか、三毛」

「先生、ひどいよ」

男は三毛を降ろすと、あぐらをかいて、三毛を見上げた。

「ごめん、ごめん、じっと立っているのに飽きてさ。まっ、怪我しないようにしたし、勘弁してくれ」

三毛は不意にぺたんとして座り込むと、男を黙って見つめた。そして、微かに俯く。

「どうした、三毛」

三毛は決心したように顔を上げた。

「先生。三毛はここにいていいのかな」

「ここにいていいよ。さて、お悩みは解決したかな」

「全然解決していないよ」

三毛が唇を噛しめ俯く。男は困ったように笑みを浮かべると、三毛に話しかけた。

「何に悩んでいる。もし、考えが堂々巡りをして、答えが見いだせなくなっているなら話してごらん。おじさんが答えを出せるかどうかはわからないけど、一緒に悩むくらいならできるよ」

俯いたまま、三毛が話した。

「黒ねえさんはとっても強い、白ねえさんはとても頭が切れる。だから、母さんの役に立つけど、三毛はそんなに強くないし、賢くもないから、母さんの役に立てないんだ」

「親はさ、役立てるために子供を育てるんじゃない、育てたいから、それに、育てていると幸せだから育てるのじゃないかな。なら、役に立つ立たないは意味がないんじゃないか」

「でも、でもさ。母さんに喜んで欲しいし、役に立つのを見せたいんだ」

「しっかりしているなあ」

男は笑みを浮かべると、三毛を眺めた。人それぞれ、切実なものを背負って生きている。時に生き死にをかけた行為をする者なら尚更か。

「三毛やさ、黒や白を見ていて、叔父さんは幸の特徴をね、それぞれ受け継いできたなあって思う。黒は武術的な身体能力、白は思考速度や理解力。三人ともそれぞれ受け継いで来ているのはそうなのだけれど、元からの性格が影響するのかな、特に突出したものがそれぞれにあるなあって思う。ならさ、三毛は幸から、特に受け継いだものはなんだろうな」

ゆっくりと三毛が顔を上げた。

「母さんから受け継いだもの・・・」

不意に三毛が泣き出しそうな顔になる。

「三毛は何も受け継いでいないよ」

男がくすぐったそうに笑った。

「困った子だなあ、一番大切なものを受け継いでいるのに、それに気づかないなんてさ。困った、困った」

驚いたように、三毛が男の顔を見つめた。男はいたずらげににっと笑うと左手を広げて見せた。

「幸の左手も小指がないだろう、理由を聞いたか」

三毛が首を横に振った。

「だって・・・。なんだか、聞きづらいもの」

男は手を戻すと、三毛に言った。

「いつか、思い切って訊いてごらん。三毛になら、困った顔をしながらも答えてくれるだろう。さてと、三毛はさ、あさぎと一緒にいることが多いな、どうしてだ。姉二人は幸にまわりついているのに。お姉さん達が邪魔で割り込めないか」

「そんなことはないよ。特に何も・・・」

「二週間前だったな」

男が言った。

「えっ・・・」

「二週間前までは、三毛も幸と一緒にいた。三毛、見たんだろう、一瞬、あさぎが寂しそうな表情を浮かべたのを。慌てて、あさぎは笑みを浮かべて、何事もなかったように振る舞ったけどさ」

三毛は驚いて男を見つめた。

「あさぎも悩んでいたと思う、自分のここに存在する理由をね、探していたと思うよ。理由は家族なんだから、で、充分だと思うのだけど、かけてきた時間が少ない分、なにか補うものが必要なんだろうな。人の心は本当に難しい」

いたずらげに、男がにっと笑った。

「三毛。寂しげな表情を見せたあさぎに寄り添いたいと思ったんじゃないかな。そうすれば、あさぎが微笑むことができるんじゃないかってさ」

三毛が驚いたように目を丸くし、男を見つめた。

「三毛は呆れるほどね、幸とここがそっくりだ」

男は笑みを浮かべると、右の親指で自分の左胸を指さした。

「うん」

三毛が笑みを浮かべて頷いた。

「なんだ、今のいままで泣いていたのに」

男は笑うと、立ち上がった。

「白は叔父さんにさ、自分達は三人で一人なんだと言った、それがとても嬉しいとも言っていたよ。それに、黒は・・・、うーん、あいつの頭の中はケーキのことでいっぱいだからなあ。なにも考えていないかもしれないな」

「ありがとう、先生」

「どう致しまして」

男がふっと顔を上げる、幸が笑みを浮かべて佇んでいた。

「あさぎ姉さん、お昼ごはんが冷めちゃうって怒っているよ。みんなで一緒に食べたいから待っているのって」

「ごめんなさい、先生を呼びに来たんだった」

男は笑うと、三毛の後ろに回り背中をほんとに押す。

「三毛、母さんに何か言うことはないか」

三毛は少し戸惑う表情を浮かべたが、そっと呟いた。

「母さん、お母さん」

幸は笑みを浮かべると両手を差し出した。

「おいで」

三毛は嬉しそうに笑うと、しっかりと幸に抱きついた。

「母さん、三毛も母さんが大好きだよ、とっても好きだよ」

幸がしっかりと三毛を抱きしめる。

「母さんもね、三毛が大好きだよ。ありがとう、三毛」

「あさぎ姉さん、お腹減ったよ」

黒がばたばたとあさぎのいる台所にやってきた。

「もうすぐ晩御飯だよ」

「お腹が減って待てないよお」

「しょうがないなあ」

あさぎが何げなく黒のお腹をとんと右手で押す。

「このお腹の柔らかさは脂肪ではありませんでしょうか。太り過ぎはだめだぞ」

「だ、大丈夫だよ。しっかり練習するよ。おもいきり動くよ」

あさぎは笑うと、戸棚を開けてみた、御煎餅があったはずだけど。

「あれ、ないなあ、お煎餅」

「ごめんなさい、昨日食べちゃった」

黒が申し訳なさそうに言う、呆れたようにあさぎは笑みを浮かべたが、ふと、思い出して、床のバスケットを覗き込んだ。

「黒、幸が買い物ついでにこんなの、買って来てくれたよ」

あさぎが箱を取り出す。

「わっ、ホットケーキの素だ」

「ホットケーキを食べたい人」

「はい、はいっ」

黒が元気よく手を上げる。

「それじゃ、一枚だけ焼こうか」

「うん」

黒は思いっきりの笑顔で頷くと戸棚からお皿、冷蔵庫からメイプルシロップを取り出した。あさぎはノートを取り出すと、ホットケーキのページを繰り、粉と水の量を確認する、そして電子秤を取り出した。

あさぎは自分の作った料理をすべて控え、量や加熱の時間なども細かく記していた。

正確に粉の量を計る。

横で、黒がその様子を覗き込んだ。

「あさぎ姉さんはきっちりしているね」

「ん、だって、いつも美味しいのを食べて欲しいもの」

あさぎが黒に笑みを浮かべる。

「美味しいのを作りたい。折角、父さんや幸に御飯作るの任せてもらったんだから」

「でも、大変だね」

「そんなことないよ、料理を考えるのはとっても楽しいし、洗い物はみんなですべてしてくれるんだから」

あさぎは片側焼けたホットケーキをフライパンの中で引っ繰り返した。

「もうすぐだよ」

あさぎの言葉に、慌てて、黒はお皿を差し出した。

「はい、出来上がり」

あさぎはホットケーキをすくい上げると、黒のお皿に置いた。

「ありがとう、あさぎ姉さん」

黒はテーブルにつくと、たっぷりとメープルシロップをホットケーキに掛け、食べ出した。

「美味しいよ、あさぎ姉さん」

「どういたしまして」

あさぎは笑みを浮かべると、夕食の準備を始めた。

鼻歌を歌いながらホットケーキを食べ終わると、黒があさぎの横でお皿を洗う。

「それじゃ晩御飯まで練習して来るよ」

「頑張ってるね」

「はい」

黒が元気よく返事し、駆け出して行った。

「そっか、お煎餅食べたの、黒だったのか。今度から、袋に名前を書いておかなきゃ」

幸が笑みを浮かべ、テーブルについていた。

「幸、黒を叱らないでね」

「うん、食べ盛りだ、しょうがないよ。でも、黒は力み過ぎで無駄な力を出すから、余計にお腹が減るのかもしれない。そろそろ、力を抜いて動くことを教えようかな」

ふと、幸はあさぎを見つめた。

「あさぎ姉さん、頭痛や立ちくらみ、どうかな」

「大丈夫、幸の教えてくれた体操を練習するようになってから、とっても元気、嘘みたいに頭痛も消えちゃった」

「安心した。それじゃ、幸にもホットケーキを焼いてください。晩御飯まで待てないよ」

「幸もなんだか子供だ」

「母さん、ホットケーキを焼いてください」

「ホットケーキを焼くから、母さんは勘弁してください」

あさぎが幸せそうに笑った。

あさぎが幸のためにホットケーキを焼く、ふと、幸は白と三毛、二人の気配を感じた。

「はあい、出来たよ」

あさぎがお皿にホットケーキを載せ、お箸を添える。幸はスープ以外は箸を使っていた。

「あさぎ姉さんのホットケーキは特に美味しいよ」

照れ臭そうにあさぎが笑った。

「美味しそうな匂いがしますねえ」

ふっと、白が硝子戸を少し開け、中を覗き込んだ。

「母さん、ずるいよお」

三毛も同じく顔を突き出す。

「ん、うわっ、な、何を言うかな。これは白と三毛のためにあさぎ姉さんに焼いてもらったんだよ」

「ほんと、ですかあ」

白が笑いながら言った。

「もちろん。えっと、あさぎ姉さん、さっき言ったように、二人に取り分けるためのナイフをください」

「随分と説明的な台詞だ」

「何を言うかなあ、白、素直さは大切だよ。二人ともおいで」

二人はぱたぱたと台所にやってくると、ホットケーキを切る幸の手元を見つめた。

「母さん、ピザみたいに、六等分してください」

白はそう言い、幸の切った後からメイプルシロップをホットケーキにかける。

そして、そのうちの一つを摘まんで、

「母さん、あーん、して」

はぐっと一切れを幸が食べた。

「食べ物の恨みは怖いですから、特に母さんは」

白がにっと笑った。

「それじゃ、三毛はあさぎ姉さんにあげるよ」

慌てて、三毛は皿ごとあさぎに差し出した。

「それじゃ、ひとつ、いただきます」

あさぎがひとつ、摘まみ食べる。そして、笑みを浮かべた。

三毛もほっと笑みを浮かべると、お皿を白に差し出した。

「白姉ちゃん、どうぞ」

白もひとつ、取ると、三毛に言った。

「三毛もあーん、ってして」

三毛が素直に口を開ける、白が三毛に食べさせる。

「白姉ちゃん、美味しい」

三毛もひとつ取ると、白に差し出した。白もそれをくわえ食べる。

「こうして食べると美味しく楽しい」

白が笑みを浮かべた。

幸はそんな二人の姿を慈しむように眺めている。そして、そっと笑った。

ふと、幸は宙を見つめた。

「ん・・・、お父さん、電車に乗った。あさぎ姉さん、幸、駅までお父さんを迎えに行ってくるよ」

「帰って来る頃には晩御飯できてるよ」

「ありがとう、晩御飯、楽しみだ」

「あ、あのね。母さん」

思い詰めたように、三毛が幸に声をかけた。

「ね、一緒に行くの、だめ」

幸はその言葉に、三毛をじっと見つめた。いま、幸と男が二人でいられるのは、この男を迎えに行く時間くらいのものであり、その間は二人っきりにいってもらおうと暗黙の了解を得ていた。

幸はにっと笑うと右手を差し出した。

「今日だけだぞ」

「うん」

幸は立ち上がり、白に言った。

「白はあさぎ姉さんのお手伝い、それと、黒には御風呂の準備をするように伝えて」

「はい、わかりました」

白が立ち上がる。

「黒姉さんに声をかけて来ます」

白を見送ると、幸は三毛の手を取った。

「あさぎ姉さん、あとはお願いします」

「うん、ゆっくりしてきていいよ」

幸は三毛の手を握り、駅前、改札口で男を待っていた。

「この時間、男が多いな。こいつら全員、抹殺できたら気分いいだろうなあ、すっきりするぜ」

「母さん、だめだよ、他人に聞かれちゃうよ」

慌てる三毛を幸が愉快に見下ろした。

「末っ子の気遣い。姉さん、二人は個性が強くて大変だからな」

「でも、いまはとっても優しいよ」

「本当の姉妹になったってことだよ、それは、とっても素敵なことだ」

幸の言葉に三毛が頷いた。

男が改札から出て来た。

「お父さん、ここだよ、お父さん」

声が一瞬にして可愛く高くなり、幸が手を振って跳びはねた。男は笑みを浮かべると幸のところにやって来た。

「ありがとう。三毛も迎えに来てくれたんだ、ありがとう」

男が三毛に笑みを浮かべた。

「あ、あの、先生、朝はありがとうございます、まだ、ちゃんとお礼を言ってなかったから」

男は三毛の頭をなで、笑った。

「叔父さんはちょっとさ、三毛の背中を押したただけだよ」

そして男は幸を見て、小さく呟いた。

「いつもありがとうな、幸。父さん、とても幸せだ」

幸は思わずぎゅっと男の腕に自分の腕を絡めると、横に並んで肩を寄せた。

もう片方の手で、男は三毛の手を握ると歩きだす。

「そうだ、ケーキ屋さんに寄るよ。黒にケーキを頼まれたからさ」

「お父さんも甘いなあ」

「しょうがないよ。買って来てくれるに間違いはないって、確信の眼差しで見つめられたら、太るからだめって言いづらい」

男は少し声を出して笑った。

「最初の時の黒が、今では想像つかないな」

「いまはね、本当に楽しそうだよ」

「黒お姉ちゃんはとっても優しくて大切にしてくれます」

ふいと男は三毛から手を放すと、三毛の腰の後ろに手を添え、すくい上げるようにして、右肩に載せた。

「わっ、空気が違います」

三毛が楽しそうに呟いた。

「風が吹いていたんだ」

三毛の視界が広がり、夜へと移り変わる寸前の空が三毛の前に広がっていた。

「お父さんも」

「ん」

「家族してるね」

「そうだね、幸せだと思うよ。幸のおかげだな」

「雲、飛行機雲です」

二人が三毛の指さす方向を眺める。紫色の空を一条の筋が駆けて行く。

「空に一筆書きをしたようだな」

男がそっと呟いた。

幸が三毛に話しかけた。

「三毛、幸せか」

「とっても、幸せです」

男の肩に揺られながら三毛が答える。

「母さんもとっても幸せだ」

照れ臭そうに幸が笑った。

「こんなふうになんかに楽しく暮らし続けたいな」

幸が思いを込め呟いた。

「そうだな。本当にそうだ」

男がそっと頷いた。

「瞳さんが襲われている、護髪が反応した」

不意に幸が声をあげた。

「お父さん、行って来るよ」

「場所は何処だ」

「瞳さん宅の前」

「なら、父さんが行こう。幸は家に戻りなさい」

「でも」

「幸、父さんの今日の記憶を読みなさい」

「いいの」

男が頷いた。

幸が男をじっと見つめる。そして、頷いた。

「お父さん、お願いします」

ずっと幸の姿が消えた。

「母さんが消えた・・・」

「先に帰ったのさ。三毛、叔父さんの頭にしっかりと掴まっていなさい」

「は、はいっ」

男と三毛の姿も消えた。

「うひゃひゃやあつ」

三毛が大声で叫ぶ。

「左脇腹、打撃」

「はいっ」

男の声に三毛は着地すると、ずっと黒い服を着た男の脇腹に右手を添えた。一瞬、三毛の全身が写真のピンぼけのようにぶれる。黒服がすっと真下に落ちた。

瞳を拉致しようとした黒服は三人。一人は瞳自身が倒したが、後二人に瞳は苦戦していたのだった。

「顎、回し蹴り」

ずっと息を飲むと、三毛はふわりと浮かび上がり、瞬間高速回転、左脚で相手の顎を蹴る。棒立ちになり、そのまま、もう一人の黒服が崩れ落ちてしまった。

ほおっと三毛が息を吐いた。

「初めてでこれだけ動けば充分。お疲れさま」

三毛はしゃがみ込むと、そのまま、足を投げ出してアスファルトの上に座り込んでしまった。

「先生、ひどいですよ」

「ん、どうした」

「まさか、ここに現れた途端、相手に向かって、先生に投げ飛ばされるとは思いませんでした」

「ごめん、ごめん」

男が楽しそうに謝った。

「ただ・・・」

「ん」

「母さんなら、もっと強く投げ飛ばして、三毛は向こうの壁にぶつかっていたかもしれません。それを思うと先生で良かったと思います」

男がくすぐったそうに笑った。

「否定・・・、できないな」

男は、道路の端に座り込んだままの瞳に向き直った。

「瞳さん、お疲れさま。少し、打ち身があるようだね、とんだ災難だったな」

「先生、ありがとうございます。でも、何がなんだか・・・」

「神崎さん、データーを盗まれたらしい。政権が変わって、この世界も新旧の勢力が随分と賑やかなことをしている。彼の対抗組織が個人情報を入力して、個別攻撃をし始めた、神崎さんも現役を守るのに手一杯らしいよ」

「そんな・・・」

瞳は俯き、唇を噛んだ。

「さて、三毛。どうだ、落ち着いたか」

「はい、大丈夫です」

「悪いけど、瞳さん宅で待っていてくれ」

「先生は」

「二度とこういうことが出来ないように、ぎゅうっとしてくるよ」

「先生、怒ってますね」

「うーん、ちょっとね」

男が普通に歩きだす、ふわりと闇に姿を消した。

三毛は立ち上がると、お尻の土を手でぱたぱたと払い、瞳の前に立った。

「初めまして、瞳さん。母さんから瞳さんのこと、伺っています」

「えっと、母さんって」

「私は先生の娘、幸の娘で三毛と申します」

一瞬、瞳が息を飲み込んだ。

「え、幸さんの」

「あ、母さんの名誉のために言いますが、貰われて来ました、えっと、養女です」

三毛は困ったように笑みを浮かべたが、少し離れたところに転がっている、瞳のだろう、スーパーの袋を拾い上げると、うれしそうに笑った。

「奇跡ですよ、瞳さん。たまご十個パック、一つも割れていません」

幸は家の道向かい、電信柱の天辺に腰掛けていた。

「戦争時の不発弾が見つかったということで、地域封鎖。警察や消防署も動いている。相手の後ろ盾は大きい方が楽しいねえ」

幸は呟くと、足元を見下ろした。

およそ五十人の黒い姿をした奴らが門扉に向かって構えていた。門扉の内側には白、数歩出て、黒が杖を構え、相手を睨みつけている。しかし、息が荒い。

倒れた男たちが十人はいるだろう、黒の体力も消耗が激しく、お互い、膠着状態だ。

「黒姉さん」

白が叫んだ。

「大丈夫だ、白。母さんや先生が帰って来るまで家を守り抜くんだ」

微かに黒の杖の先が震えている、緊張と体力の低下だ。男達は手に手にナイフや刀を持っていた。銃を使わないのは隠密行動のためか。

いきなり男達の後ろから悲鳴が上がった。次々と雪崩のように男達が倒れて行く。ふいと、幸が黒と睨み合っていた男の隣りに立つ。

「黒、白、お疲れさま」

幸はにいと笑うと、横に立つ男の脇腹に手を差し込んだ。男が恐怖に満ちた眼差しで、自分の脇腹を眺める。

「殺さない方が良く、自分の魂に傷がついてしまう。だから、殺すな。殺すと、母さんみたいになってしまうぞ。ただな、倒れた奴が起き上がって来たら面倒だろう。だから、半殺しにはしておけ」

幸が手を捻った、瞬間、男が叫び声をあげてのたうちまわった。幸は、男のあばら辺りの皮膚と骨の折れたのを無造作に投げ捨てる、倒れていた男の上着で手を拭く。

「白」

「はいっ」

「あさぎ姉さんが大変だ、介抱してきなさい」

「わ、わかりました」

あたふたと白が家に飛び込んだ。

「黒」

「は、はい」

「びびったか」

にいと幸が笑う。

「母さんにびびった」

呟くように黒が答えた。

「この野郎、正直すぎるぞ」

幸は黒の頭を撫でようとしたが、両手がまだ血で赤く染まっているのに気づいた。

「手を洗って来るよ、黒も家に戻って休みなさい」

「か、母さん、この人達は」

「人達ってか、ま、そこが黒の良いところかもしれないな。連絡係が一人いた、そいつには手を出していないからさ。回収に来るだろう、一時間も経たないうちに何事もなかったようになってるさ」

幸は気にすることもなく、庭へ回り込み、洗い場へと手を洗いに行く。

「母さんみたいに強くなりたい。しっかりと妹達を守りたい」

幸の後ろ姿を見送りながら、黒が小さく呟いた。

幸は外で手を洗うと台所へ向かう。白が倒れたあさぎを抱き抱えていた。

「あさぎ姉さん、あさぎ姉さん」

耳元で白が囁いていた。幸は白の向かいに座ると、あさぎの手を両手でしっかり握った。そして、あさぎの耳元で語り出した。

「あさぎ姉さん。妹の幸です、あさぎ姉さんは幸の真ん中のお姉さんです。一番上のお姉さんは幸乃さん、ちょっと怖いお姉さんで幸は逆らうことが出来ません、あさぎ姉さんは次女、とっても優しいお姉さんです。声をかけていたのは白、幸の娘です。幸には三人の娘がいます。長女は黒、真ん中が白、末っ子が三毛です。お父さんがいます、お父さんはとっても優しい人です、思い出しましたか、あさぎ姉さん」

ゆっくりとあさぎが目を開いた。

「ごめんなさい、幸さん。なんだか、急に自分が誰だかわからなくなって、頼りなくて、不安になってしまって、生きていいのかどうかもわからなくなってしまって・・・」

「それは、時間が解決してくれるよ。ね、あさぎ姉さん」

そっとあさぎが微笑んだ。

「ありがとう、幸。ごめんね」

あさぎは白に顔を向けると笑みを浮かべた。

「ありがとう、白。白の声が聴こえて、切れかけていた何かが繋がった気がしたよ。白、ありがとう」

「どういたしまして」

囁くように陰りのある笑顔で白が答えた。

「うわっ、どうしたの。あさぎ姉さん」

黒が驚いて声を上げた。

幸が微かに笑みを浮かべた。

「黒の食べ過ぎを心配して倒れたのかも」

「え、あっ。だ、大丈夫だよ。あさぎ姉さん、黒、太ってないよ。歯も磨いてるよ」

あさぎがくすぐったそうに微笑んだ。

「それなら、安心だね」

玄関の戸が開く音。

「ただいま」

男の声が玄関口でした。

「黒姉ちゃん、お土産だよお」

三毛がぱたぱたと部屋に戻って来た。

「黒姉ちゃん、先生がケーキ買ってくれたよ」

三毛が黒に両腕に一杯に抱えたケーキの箱を差し出した。

「いやっほおー」

黒が喜色満面に喚声をあげた。

「黒の単純さは救いでもあり、毒でもあるな」

幸が笑った。

黒のケーキ踊りを眺めながら、白がくすぐったそうに笑う。

「黒姉さんはとっても真面目です。嘘やごまかしができないから、却って、感情に針が大きく振れてしまう。でも、それが、ちょっと、うらやましい」

「そういうのは一人で充分、勘弁してくれ」

幸も楽しそうに笑った。

「ケーキ踊りもなんだか定着したなあ」

男が黒と三毛、ケーキ踊りをする二人を眺めた。

「お父さん、お疲れさま」

幸が可愛らしく男に声をかけた。

「ん、ただいま」

「どうなった」

「無事済んだかな」

男がそっと笑みを浮かべた。

「あさぎ、どうかな」

「ごめんなさい、お父さん。なんだか、急に。でも、皆が戻って来てくれて、今は元気。さっきまでが嘘のようです」

「そっか、良かったね。ん・・・、白」

ふいと男は白を見つめた。

「はい・・・」

「極度の緊張が残っているな」

男は白に寄ると、その後ろ首筋に手のひらを何か払うように動かした。

「どうだ」

「体が暖かくなりました、どうしたんだろう」

「筋肉がぎゅっとしてしまっ、流れが滞っていたのさ、指先や足先の冷たいのも、すぐに暖かくなるだろう。黒は・・・、あれは大丈夫か。あれだけはしゃいでいるなら」

ふと、あさぎが呟いた。

「なんだか、とっても嬉しい」

「ほんと、そうだよ」

幸がしっかりと頷いた。

ここ最近の習慣、男が自室で一人で眠り、あさぎと幸、黒達五人が広間で寝る。あさぎと幸は両端で、その間を、三人がそれぞれ、好きなところで寝ていた。

「ね、母さん」

白が少し不安げに言った。

「母さんの横で、寝て良い」

「いいよ、白。おいで」

灯りを消し、眠りにつく。

白がぎゅっと幸の腕を抱き締め、小さく幸に囁いた。

「母さん、白は怖くて動けませんでしたが、あんなに教えていただいたのに。白は役立たずです、ごめんなさい、ごめんなさい、母さん」

幸は少し身を起こすと、もう片方の腕で白をしっかりと抱き締めた。

「心配することはないんだ、白は大切な母さんの娘だよ」

夜中、男は襖の向こうの気配に目を覚ました。

「いいよ、幸。入りなさい」

男が体を起こすと同時に襖が開く。幸が泣き出しそうな顔をして立っていた。

「おいで、幸」

幸は男の部屋に入ると、後ろ手に襖を閉める。

そして男の横にひざまづく、何も言わず男にしがみついた。

「白がごめんなさい、っていうの」

男はそっと幸の頭を撫でた。

「なるほどね。白も不甲斐ない自分自身に戸惑っていたんだな。それだけ、三人とも、しっかりと成長しているというわけだ」

「お父さん、どうしたらいいんだろう。どうしたら白に自信を持たせることができるのかな」

「そうだね」

男は笑みを浮かべると、軽く幸の肩をたたく。そっと幸が顔を上げた。

「今まで幸はね、三人の指導者として、これを覚えなさい、身につけなさいと教えて来た、つまり、一歩先から三人を引っ張って来たわけだ。ただ、彼女たちも成長して、個性というかな、人格がはっきりしていくようになってね、画一的なやり方が合わなくなったのかもしれないな。幸、白にはね、一度、同じ位置で寄り添ってみたらどうかな」

「寄り添う」

幸が男の言葉を重ねた。

「白がね、自信を持てるようにさ」

幸はそっと笑みを浮かべると、小さく頷いた。

「さあ、幸。白の横に戻ってあげなさい。幸がないのに気づいたら、白があわてるぞ」

幸はそっと男に口づけすると、笑顔を浮かべた。

「お父さん、起してごめんなさい」

「どう致しまして。幸の泣いたの、久しぶりに見たよ」

「もお・・・、お父さんったら」

「嫌です、白は何処にも行きません」

朝、白の大きな声に男が部屋を覗き込むと、白が部屋の柱にしがみついていた。黒と三毛はおろおろとしているし、幸は困り果てた顔をして座り込んでいる。

あさぎは、白の大きな声に頭痛だろう、うずくまっていた。

男はあさぎが普通に生活できるようになるまで、まだ、数カ月かかるだろうなどと冷静に判断をする。

男は白の横に座ると、にっと笑みを浮かべた。

「白は幸の娘で、大切な家族だ。だから、何処にも行っちゃだめだぞ」

「え・・・」

白が驚いたように男を見つめた。

「幸と一緒に旅に出ようって言ったのかな」

「は、はい」

「で、捨てられると思ったか」

白はその言葉が口に出せず、ただ、頷いた。

「白も黒も三毛もさ、随分成長した。それは、叔父さんも見ていて思うよ、しっかりしたなあってね。ただ、それぞれね、個性がはっきりしてきて、今までと同じ教え方ではだめだと幸は思ったんだろう。だから、幸は白と何日かさ、二人っきりで過ごすことで、何かを見いだしたいって思ってね、旅をしようって言ったと思うよ。もっとも、旅っていっても、二、三日のことだろうけどね」

ゆっくりと、白が柱から手を離した。

「しばらく幸をお願いしますよ。幸はさびしがり屋だからな、泣き出したら叔父さんの代わりになぐさめてやってくれ」

男は白の頭を軽く撫でると、ふと思いついて言った。

「白、髪の毛、一本、くれるかな」

「はい・・・」

白は髪の毛、一本を抜くと、男に手渡した。男はその髪を鴨居に結び付ける、溶け込むように髪の毛が消えた。

「白がどんなに迷子になっても、時と距離を越えて、白にこの家への道筋を教えてくれるよ」

初めて、白は安心したように笑みを浮かべた。

「幸、準備をきなさい」

「はい」

幸があわてて返事をした。

「白、せっかくだ、美味しいもの、たくさん、食べてきなさい」

急に黒が叫んだ。

「美味しいもの。ずるいよ、黒も美味しいもの食べたい」

男が笑った。

「あさぎの作ってくれるご飯、黒は美味しくないのか」

「もちろん、美味しいよ」

「なら、黒も毎日、美味しいものを食べているじゃないか」

「え。あ、そうか・・・」

一瞬、黒は納得しかけたが、あわてて声をあげた。

「その美味しいじゃないよ」

「うーん、黒もしっかりしたなあ、ごまかしが効かなくなってきた」

男は嬉しそうに笑うと、黒に言った。

「今から叔父さんが一から十まで数えます。黒は叔父さんが十まで数える間に、ちょっと贅沢で普段は食べないような晩御飯を言いなさい。一、二、三、四」

黒があたふた、考えを巡らせる、

「えっと、あの」

「早くしないと、普通の晩御飯になってしまうぞ、五、六」

「ぴ、ピザ、ピザが食べたい、空揚げやソーセージや、いっぱい載っているピザ」

男は頷くと、あさぎを見る、ほっとしたように、あさぎは顔を上げていた。男と黒の会話が空気を和ませ、あさぎの頭痛を取り除いたのだろう。

「あさぎ、ピザ、いいかな」

「はい、頑張って作ります」

あさぎがほっとしたように笑った。男がついとカレンダーを見る。カレンダーには印があった。

「啓子さんとあかねちゃんが来るのか。なら、黒」

「はい」

「ピザに載せるもの買いに、啓子さんと一緒に買い物に行ってください。それと、ピザの生地をこねるの大変だから、あさぎの手伝いをすること、いいかな」

黒が満面の笑みを浮かべて頷いた。

「さてと、三毛にはまだ聞いていなかったな、何が食べたい」

「三毛は特には何も。ピザも大好きだし」

「三毛は控えめだな。でも、妹があまり控目だと、黒姉ちゃんは妹に気遣って、ピザいらないです、大根のお漬物だけでいいですっていうかもしれないぞ」

にと男が黒に笑いかけた。

黒が必死の顔をして、頭を横に振る。

「ないない、そんなことない」

緊張した声で黒が答えた。

慌てて、三毛が言った。

「手巻き寿司が食べたいです」

男は頷くと、黒に笑いかけた。

「今晚はピザ、明日の晩は手巻き寿司、良かったな。黒」

「もう、先生は意地悪だ」

黒がほっと安心して、足を投げ出して座った。

男が愉快地笑みを浮かべた。

「お父さん、それじゃ出掛けます」

幸の声に男が振り返ると、幸は黒のカンフー服、白はそれだけは嫌だと拒絶したのだろう。茶系統のチェックのワンピース。

「幸は相変わらずだな」

男が呆れて言った。

「白にも勧めたんだけどね、絶対嫌だって」

「母さんの趣向は理解できません。そんな格好でうろうろしたら、警官に職務質問されてしまいますよ」

「大丈夫だ、白。その警官は話の途中で意識を失い、倒れてしまうだろう」

にいと幸が笑みを浮かべる。

「白、幸を頼んだよ」

男は仕方なく笑った。

幸と白は列車、二人掛けの座席を隣り合って座っていた。白が窓際で流れる風景を眺めている。

幸は通路をじっと見つめていた、

「来たっ」

車両のドアが開き、カーゴを押して売り子がやって来る。

「白、弁当を買おう、それにお菓子とお茶も」

「母さん、朝ごはんを食べてから一時間と経っていませんよ」

呆れたように、白が言った。

「何言うかな。法律で売り子さんが来たら弁当を買わなきゃならないって決まったの知らないかなあ」

「なるほど知りませんでした、日本以外の、何処の国で決まった法律ですか」

「幸王国、憲法八条三項にちゃんと書いてある」

幸は嬉しそうに笑うと、売り子を呼び止めた。

「お弁当とお茶、二つずつお願いします、それと、そのお煎餅も」

幸は両手で受け取ると、弁当一つを白の膝に置き、二人の前の座席の背中にあるテーブルを倒して、それぞれにお茶を置いた。

「なんだか、一気に旅気分、いいなあ」

「あの、母さん」

「ん」

「まだ教えてもらっていません、目的地とか」

幸はお弁当の紙包みを広げながら、思い出した。

「そういえば、旅に行こうってそれだけだったよね」

「先生は何か伝えようとする時、順を追って分かりやすく説明してくれます。母さんは大事な話を省略してしまいます」

「柱にしがみついている白、どうしようかって悩んだよ」

「恥ずかしいこと思い出させないでください、本当にあさぎ姉さんにも迷惑を掛けてしまいました」

「ごめんな、白。反省してる」

幸はふと手を止めると目をつぶった。

幸はふと手を止めると、俯き目をつぶった。白がふっと幸の手に自分の手を重ねる。

「ごめんなさい、白は黒姉さんみたいに陽気でもないし、三毛みたいに素直にもなれないんです。でも、母さんが大好き、とつても」

不意に幸は片腕を白の肩にまわすとぐっと引き寄せた。

「ありがとう、白」

啓子は家続きの元事務所、事務机などは取り去られ、広々とした中で、うーんと唸りながら、立て掛けた、原木を縦に切ったままの分厚い板を見つめていた。

喫茶店のテーブルにする予定の板である。おおよその、乾燥は済んでいた。

啓子の隣りではあかねがしゃがんだまま、ぼおっとそれを眺めていた。

「思っていたより幅がありますね」

あかねが顔を上げ、啓子に言った。

啓子は頷くと、メジャーで横幅を測る。

「並んだ四人が、向かい合って、うん、八人ってとこだ」

「おじいさまも、もう少し小さいものを送ってくだされば」

板は鬼紙老が、孫が世話になっているからと送って寄越したたものだった。

「他の調度品を工夫すれば、大丈夫だよ。案外、名物になるよ、これだけの物を使っている店ってそうはないからね」

そう言って部屋を見渡す。

「あとは、壁をどうするか、和風にしてしまうのもありだし、無国籍風もいいかな」

「あさぎさんの希望が一番でしょうね」

あかねは笑みを浮かべると、ゆっくり立ち上がった。

「あさぎさんが料理を作って、あの娘達がウエイトレス。なんだか、私達も、忙しい時のアルバイト要員として数に入っているらしいですよ」

あかねが楽しそうに笑った。

「先生がウエイターって当初の計画よりかはずっといいよ」

「お客さん、怖がってしまうのでしょうか」

「うーん、ってより」

啓子はふと言葉を止めて考えた。

「多分ね、先生の存在に誰も気づかないと思う、そして、いきなり耳元で、囁くような、いらっしやいませって声が響いて、お客さん、飛び上がって驚くという」

「それって、啓子さん、話をおもしろくしようとしていませんか」

「ちょっとね」

いたずらげに啓子が笑った。

「啓子さん、あかねちゃん」

ぱたぱたと三毛が走り寄って来た。

「よう、三毛助、どうした」

啓子が嬉しそうに笑った。

「その呼び方はやめてください、もお」

「あはは、ごめん」

「啓さんはすぐからかうんだから」

啓子は嬉しくてたまらないと、三毛を抱き上げた。

「三毛は可愛いな。そうだ、三毛、ウエイトレスはエプロンドレスで、猫耳と尻尾を出してって、それいいよ、受けるぞ」

暴れるように三毛は啓子から脱出すると、ため息をひとつついて、座り込んだ。

「それはもう既に母さんに散々、試させられました。啓さんは母さんと一緒ですよ」

「で、結果は」

「耳も尻尾もリアルすぎるという結論で、不採用」

あかねも笑みを浮かべると、そっと三毛の頭を撫でた。

「お疲れさま、三毛ちゃん」

「はい」

三毛が疲れたように頷いた。

「メイドにしてしまうと、男性客ばかりになってしまうよね、考えてみれば」

ふと気づいたように啓子が言う。

「母さんも同じこと、言っていました、ゲロゲロだあって」

「おおい、早く来てよ。お腹減ったよ」

黒があたふたやって来た。

あっと三毛が二人を呼びに来た用事を思い出した。

「啓子さん、あかねちゃん。ごめんなさい、おやつです、あさぎお姉さん作ったケーキ。お店のと同じですよ。とっても美味しいです」

「ここは」

白が小さく呟いた。

山の頂上近く、いくつもの墓石が並んでいた。青く抜ける空の下、来る人もないのだろう、背の高い墓石もつる草や雑木に埋もれかけている。

「限界集落と呼ばれている、もっとも、最後の住人が山を下りて1ヶ月ってとこだ、だから、正確には元集落だな」

幸は墓に背を向け、見下ろす。いくつもの山が重なり、その向こうには、青色、ほんの少しだけ海が見える。

そして振り返ると、一つの墓石の前に立ち、ぐいっと絡まった蔓草を引きちぎる。

「草生えたままにしておくと、お父さんに叱られてしまう」

「母さん、それじゃ、ここは」

「母さんが生まれたところ、全ての始まりの場所だった」

白が慌てて、幸を真似、草を抜いていく。

現れた墓石は風化が進み、角が欠け、彫られた文字も読みにくい。

「読んだってしょうがないよ、母さんは捨てられたんだからさ」

文字を覗き込む白に、幸がそっと笑みを浮かべた。

振り向く白に、青空を背景にした幸が笑みを浮かべる、白には幸が人を越えた、神や天女に見えた。

「まあしかし、それでお父さんとこうして暮らすことが出来て、それに良い娘も出来た。そういう意味では幸이었다のかもしれないな」

「母さん、綺麗・・・」

ふともらした白の言葉に、にっと幸が笑った。

「娘に褒めてもらえるのは嬉しいものだ」

幸は、麓で買ったペットボトルの栓を取ると、水は墓石に掛けた。

「また、一年したら来るさ。さて、白、準備は良いか」

幸はペットボトルの栓をすると、墓石の横に置いた。

白は大きく深呼吸をすると、幸にうなずいた。

「何人いるか、わかるか」

「四人」

「離れている奴を合わせれば六人だな。ここへは単純に墓参りだけのつもりで来たんだけど、なかなか、楽しいことになった」

幸は空中から杖を取り出し、白に手渡した。

「襲われる理由はわからないけど、折角だ、練習相手になってもらおう」

「はい」

「相手の間合いは半歩前進で崩せ、以上」

幸がふわっと後ろに下がる、白は右半身上段に杖を構えた。雑木や墓石にその姿は見えないが、前に三人、後ろに一人。

ふいっと白が横目で、背後を眺めた。

黒装束、まるで映画から抜け出したような忍者が飛び込んで来る、片手に忍者刀、直刃の凶刃が背中から白の胸を貫く、白は反転し、杖で刃を流しつつ、相手の首に杖の先を差し出した、瞬間、身を沈め、敵の顎に杖の先を絡めつつ、その上半身を後頭部から地面に叩きつける。

白の眼の端で影が移動した。

影に杖を突き出す、三人の内、一人の太ももを貫いた。

「ごめんなさい」

白が思わず呟いた。残った二人の刃が頭上にきらめく。瞬間、白は二人の忍者に身を寄せた。なみゆいの特徴は接近戦にある、白は相手の胸に突き放った肘をそのまますりあげる、前のめりに一人が倒れた、すっと白が姿勢を落とすと同時に、独楽のように回転し、蹴り足が相手の膝を粉砕した。

「お疲れさま」

幸がぎゅっと白の手首を握った、白の腕が微かに震えていた。

「母さん、白はなんだかとても怖いです」

幸がしっかりと白を抱き締めた。

「大丈夫だよ、白」

幸はゆっくりと体を離すと、笑みを浮かべた。

「今晚は温泉でゆっくりしよう、行きたいところがあるんだ」

「あ、あの、この人たちは」

幸は無造作に杖を相手の太ももから引き抜く、そして杖を消した。

「うーん。ただのさ、歴史や廃墟のマニアってのかな。白や母さんがそんなだったら、こっちが地面に倒れている側だ。それはわかるな」

「はい・・・」

「なら、このままほっといてもいいんじゃないか」

「たしかにそうなんだろうけど、でも」

戸惑う白に、幸は困ったように笑った。

「黒も似たようなこと、母さんに言ったよ。白と黒は甘いなあ、あんまり甘いこと言っていると寝首をかかれるぞ」

幸は呻いている忍者の太ももに触れた、見る間に流れていた血が止まる。

「そっちは首がずれたか、むちうちだな」

幸が足先でその忍者の背中をとんと軽く蹴る。

「あとの二人はほっといても眼を覚ますだろう。さて、指導役の二人もとうに逃げ出した。いくぞ、白」

「はい」

「なんだか白が急に元気になったな」

黒は一抱えもあるピザの生地を力いっぱい、こねていた。

「黒、大きいよ。三つくらいに分けた方がやりやすいよ」

あさぎが心配そうに言ったが、黒はにと笑う。

「武術の練習にもなるから、大丈夫だよ。ね、あさぎ姉さん、おっきなピザ、できるかな」

「五十センチのピザが五枚は焼ける予定」

黒が心の底からの笑顔を浮かべた。

「本当に黒は食べることが好きだね」

「なんか、食べるものがあるってだけで安心してしまうんだ。ここで暮らすようになってから、とても幸せで、安心でいられる。自分が居てもいいところがあるってというのがとっても素敵なんだ」

あさぎはふと手を止め呟いた。

「本当にそうだね」

「あさぎ姉さん、泣いてるの」

心配そうに、黒があさぎの顔を覗き込む、あさぎは手の甲で涙を拭くと笑みを浮かべた。

「助けてもらわなかったら、道でそのまま消えていたんだなって思うと、なんだかね」

「良かったね」

黒がにと笑った。

「とっても良かった」

あさぎも笑った。

「黒姉ちゃん、あさぎ姉さん」

三毛が台所にやって来た。

「啓子さんが石釜に火をいれたよ。これから釜を温めて、一時間くらいでピザが焼けるようにするって」

「それじゃ、海老や帆立も下ごしらえしなきゃね」

あさぎが鍋を取り出す。三毛が買い物袋を覗き込んだ。

「黒姉ちゃん、いっぱい買ったね」

「おう、三毛もいっぱい食べるよ」

「うん」

嬉しそうに三毛が笑みを浮かべた。

「啓子さんもあかねちゃんもいっぱい食べるって」

「みんなが、お腹いっぱい食べるって楽しいなあ」

黒が心から嬉しそうに笑った。

釜の火を見つめながら啓子が言った。

「面白いなあってつくづく思うよ」

あかねは啓子の隣りでしゃがんでいる、少し、日が陰りだし、二人の顔を釜の火が赤く照らして

いた。

「何がですか」

「人生」

啓子はそう言い切ると、少し恥ずかしげに笑った。

「啓子さん、人生を語るにはまだまだ早いですよ」

あかねも楽しそうに笑った。

「でもさ、大学出て、就職したはいいいけど、その就職先が悪の組織だよ、それも、下っ端の戦闘員だぜ、覆面に全身タイツ。それが、襲う相手の先生に投げ飛ばされて、今じゃ、農業の手伝いして回って、こうやってさ、先生宅でピザを焼こうとしているんだから、面白いっていうか、不思議だ」

「縁があったのでしょうかね」

「運命論者じゃないけど、そうだね。偶然が単純に重なっただけって思うより、縁が在ったと思う方が嬉しいな」

そとあかねが笑みを浮かべた。

「どうしたの、あかねちゃん」

「啓子さんって可愛いなって思いました」

啓子は気恥ずかしそうに笑うと、釜に薪をほうり込んだ。

「参った、中学生に負けた気分だ。あかねちゃんがまだ中学生っての、なんか反則だよ」

あかねが声を出して笑ったが、ふと、振り返った。

「先生、駅に着きました、幸さんの代わりに迎えに行ってきます」

「なら、黒か三毛と一緒にいった方がいいよ」

「ええ、頼んでみます」

男が紙袋を片手に、駅近くの商店街前を通り過ぎた時、あかねと黒があたふたと走り寄ってきた。

「おじさん、ごめんなさい。迎えに来るの、遅くなってしまいました」

あかねが息をはずませ言った。

「あかねちゃんに黒も、わるかったね。迎えに来てくれたのか」

「先生、ちゃんと手伝ったよ。帰ったら、ピザ、いっぱい食べよう」

「そっか、それは楽しみだな。なら、今日はケーキ屋さんに寄らなくてもいいかな」

「え・・・」

一瞬、黒が硬直した。

「そうだ、ケーキ。ケーキ忘れてた。ピザの後はみんなでケーキ」

「おじさん、余計なことを言ってしまいましたね」

あかねが笑った。

「ほんとだな。でも、黒の幸せいっぱいケーキをほお張っている姿を見るのも楽しいからさ」
三人は駅前の洋菓子店へ。店内には椅子とテーブルがあり、男は持ち帰り用にケーキを注文し

た後、テーブルについた、向かい側にあかね、その隣りに黒が座った。

「珈琲だけ飲ませてくれ」

男は笑みを浮かべると、珈琲を注文し、二人にはジュースを注文した。

「先生、それなに。おやつ」

黒の言葉に男は笑みを浮かべると、袋から箱を出した。

「食べないでくれよ。カメラ、デジカメだ」

「おじさんがデジカメを」

「まあね。今日、取引先の会社へ書類を届けてね、ふと、その会社の社長の机に家族の写真が写真立てに入っているのを見てさ。たまらなく、家族写真が取りたくなった。で、あたふたと電気屋さんでデジカメと小さな三脚を買って来たわけだよ」

「おじさんの写っている写真って貴重ですよ。その筋に売れば、ちょっとした家の一軒くらい建ちますよ、土地付きで」

男がくすぐったそうに笑った。

「悪いことをし過ぎたと、反省の日々だよ。まっ、幸と白が帰って来たら早速、写そう。あかねちゃんも入ってくれるかい」

「もちろんです」

あかねが笑みを浮かべた。

「先生、母さんと白は元気にしているかな」

「まだ、大丈夫じゃないかな」

男がそっと笑みを浮かべた。

「すごいホテルですよ」

白はぼおっとロビーを見渡した。高級老舗ホテルのカウンターでチェックイン。幸はサインをすると白に笑いかけた。

「な、だろう。前にお父さんと泊まった時は中の上だ。部屋に露天風呂まであったんだ、もっとも、今回は予算の都合で一番安い部屋だけだな」

白は幸に駆け寄ると、幸の服の裾をつつと引っ張った。

「ん」

「母さん、お金、ほんとに大丈夫」

「大丈夫、お父さんがいっぱい出してくれたんだ」

「相変わらず、先生は母さんに甘いですね」

「だって、可愛い愛娘ですもの、ふふ」

慌てて仲居が一人、カウンターへと小走りにやって来た。

幸と目が合った瞬間、立ち止まり、仲居が呟いた。

「幸ちゃん」

幸がにと笑うと大きく手を振った。

「お母さん、久し振りです」

幸の声に走り寄ると、仲居がぎゅっと幸の手を握った。（異形六話御参照ください）

「わあ、本当に幸ちゃんだ。なんか、ちょっと大人っぽくなったよ」

「だって、三年ですよ、幸も少しは成長しますよ」

幸がくすぐったそうに笑う。

「気にしていたんだよ。だって、住所もわからないし、急に用事ができたって帰ってしまうしさ」

「あはは、ごめんなさい」

「瞳さんも元気にしているかい」

「しっかり主婦してますよ」

「お母さんこそ、手紙出した、お嬢さんに」

「もちろん。返事ももらったよ、出して良かったよ」

「気にしてたんだ、なんだか、安心した」

ほっとしたように幸は笑みを浮かべると、戸惑っている白を見つめた。

「母さんのお母さんだ、挨拶して」

「えっ、あ、あの。白と言います。えっと、娘です」

仲居が目を見張って驚いた。

「幸ちゃんにこんな大きな子が」

「いえ、あの、養女ですから。決して、母さんから産まれたわけじゃ」

「白は母さんの娘だ、誰から生まれようと関係ないよ」

幸は笑うと、仲居に言った。

「娘と旅行中なんです」

「いいねえ、そうかい。あ、あたしとしたことが、カウンター前で立ち話なんて。部屋まで案内しなきゃね」

「母さん、ゆかた、着ないの」

「ああ、男の眼が煩わしいからさ」

仲居が部屋を後にし、白はゆかたを前に、思案していた。

「白だけ、着るの、変かなあ」

幸は立ち上がると、白にゆかたを羽織らせ、正面に立つ。

「いい感じだ、可愛いよ」

はにかんだように、白が笑みを浮かべた。

「服脱いで、ゆかたを着な。風呂に行こう、それから、晩御飯だ」

「うん」

白が素直に返事する。

幸は白の、普段は見せない一面を見た気がした。

「なあ、白」

「はい」

「母さんが白や黒、三毛にさ、武術や呪術を教え続けたのは、自分自身の身を守ることが出来るようにというためだ。そして教えられることはほぼ教えたはずだ、後は教わったことを磨いて、再発見をすればいい」

白がそっとうなずく。

「白、活法を学んでみるか。怪我や病気を治す技だ」

ずっと白の顔に表情が消え、じっと幸の眼を見つめた。

「お願いします、お母さん」

本来、夕食は階下での宴会場となるのだが、特別に同じ部屋での食事となった。幸がそうしたいと、仲居に頼んだからだ。

「お母さん、幸も料理、運ぶよ」

「だめだめ、幸ちゃんはお客さんなんだから」

仲居は笑みを浮かべると、てきぱきと食事の準備をして行く。

白は幸の仲居への優しい眼差しに、少し言葉を変えるだけで、こんなにも他人と良い関係になれるのだと学んだ、自分自身の今までの言葉を思い出し、反省しなきゃと思うが、母さんだって反省しなきゃなと思う。他人によって言葉遣いを変えるよりも、誰に対しても優しくありたい、少なくともあきらかな敵以外は。ふと、敵という言葉が浮かんだ時、黒姉の戦う姿を思い出した、黒姉さんに三毛、今頃、ピザをほおぼっているだろうか。

「白、御飯食べよう」

幸の声に白が顔を上げた。

「いただきます」

白はお膳につくと、幸と向かい合う。

「なんだか、変な感じ」

白が笑った。

「お膳を前に向かい合って食べるって、ちょっと、緊張するな」

幸は笑うと先付けを食べる。

「うん、美味しい。お母さん、これ、美味しいですよ」

振り返り、幸が仲居に笑いかけた。

「嬉しいね。ありがとう」

白はふと、今ならと思った。

「ね、母さん」

「うん」

幸が白に笑みを浮かべた。

「あ、あの。今まで、生意気なこと、いっぱい言ってごめんなさい。白はいい子になります」

「え」

幸は啞然と白を見つめたが、箸を落とすと、飛び上がり、白を抱き締めた。

「母さん、息が苦しいですよ」

「ごめん、ごめん」

幸は体を離すと、少し照れくさげに笑った。

「母さんも綺麗な言葉を使ってください」

「対象女性限定なら」

「一歩前進ですね」

白がくすぐったそうに笑った。

幸は不意に仲居に振り返ると声をかけた。

「お母さん、マッサージしてあげます」

急な展開に、戸惑う仲居をあっさり幸は俯せに寝かせつけてしまった。

「座布団をこう抱えるようにしてね」

幸は座布団を二つに折り、中井の胸元と畳の間に差し込む、そして、白を手まねいた。

「は、はい」

白があたふと幸に近づくと、幸は白を仲居の横に座らせた。

幸は右手で白の右手を甲から掴むと、白の人差し指を仲居の首の後ろに添わせた。

そして、ゆっくりと背骨に沿って指先を移動させる。

「背骨が歪んでいるのがわかるかな、違和感みたいなものが見えたかな。手を重ねることで、母さんの見ているものが見えて来たと思う」

白が少し興奮してうなずいた。

「活法の基本だよ」

幸は白の右手を自分の右手で、同じように白の左手を自分の左手で掴むと、仲居の腰の左右に沿えた。

「しっかり見なさい」

幸は囁くと、ほんの一センチほど両手を左へ動かす。白はブロックがぴたっとはまり込んだように思えた。

「お母さん、どう」

「どうしたんだろう、急に体が軽くなった気がする」

「お母さんは立ち仕事が多いし、荷物も運ばなきゃで、体が傷んでいる。白にマッサージを教えがてら、治してあげますよ」

幸が幸せそうに笑った。

「お嬢さんの代わりに親孝行します」

(旅館に勤める女性全員、女将も含む、全員の整体を二人は済ますことになる。書くのが面倒臭いので、気が向いた時に書く 2011.03.02)

「母さん、白はだめです、くたくたです」

白は座布団を枕に俯せに臥せってしまった。

「気安く引き受けていたら、凄い特訓になった。全員だもんね」

幸は気楽に笑うと、女将手ずから握ったおむすびを一口食べる。

白は顔だけを幸に向け、言った。

「どうして、母さんは元気なんですか。同じだけ動いていたはずなのに」

「二つ理由がある」

幸はお茶を飲むと、白に言った。

「一つは無駄な動きをしない、必要充分なだけの動きで済みます。これは、この旅の間に、お父さんが黒に教えてくれると思う。もう一つが月の光を体に蓄える内観法。これは白に教えるつもり」

幸は両手の手のひらを互いに向け合う、幸の手が白くひかりだし、手と手の間に、白い光球が現れた。幸はふわっとそれを浮かび上がらせると、軽く白にほうり上げる。

光球はそのまま、ふわりと浮かび、白の元へ、そして、白の体に入ってしまった。

ゆっくりと白が起き上がる。

「えっ、疲れがなくなった。ううん、いつもより調子が良いくらいです」

「白、今のうちにしっかり食べておきなさい、今晚は忙しくなるから」

「忙しいって」

「昼間の関係者がこちらに向かっているのさ」

幸は皿に残っていたお造りを食べる。

「白、このマグロの赤み、美味しいよ。こっちの魚はなんていうんだろ」

「母さん、昼間の人達のこと、知っているんですか」

「ん、すぐに調べた。山を降りる途中の集落、人がいなくなったのを幸いに、国が借り上げて、黒服の育成施設にしているようだ、政権が妙になったからかな、やたらと増えているようだよ、まっ、そんなのの一つだ。そして、来るのはその提携している、この近場の奴ら」

「それなら、母さん。わけを話せば」

「え」

意外なことを聞いたとばかりに白を見つめた。

「白。わけを話した上で、お父さんの話をすれば、奴ら逃げ帰るだろう。ただ、それには大きな問題があるんだ」

「問題って。先生に迷惑がかかるとか」

「いや」

幸がにいと笑った。

「単純に暴れたいじゃないか」

ふううっと、白が脱力し大きく溜息をついた。

そして、仰向けになり、幸に言った。

「母さんの場合は単なるいじめです。母さん、強すぎるもの」

「なるほど、いじめか……。子供の教育に悪いな。白が不良になったら大変だ」

冗談とも本気ともいえないような口調で幸は答えたが、良いことを思いついたと笑みを浮かべた

。

「やつら、随分、ホテルに近づいて来た。並が二十人、並の上が三人、特上が一人。並と並の上は母さん、手加減して潰すから、白、活法の練習をしなさい。その間、母さん、特上を楽しむよ」

幸はふわりと立ち上がると、窓を開け放ち、階下を見下ろした、五階、視界の端に海が少し見える、

「来た来た。あれで隠密行動とっているつもりか」

幸の嬉しそうな声に、白はあきらめて、ゆかたから、朝の服に着替えなおした。

汚れなきや良いけど。

幸の隣りから同じように見下ろす。

「心配を消し切れていません。母さん、本当に殺したりしないでください。そういうの、辛いから・・・」

「良い子に育ったなあ。育て方、正解だったかな」

「母さんの言動を見て、色々、考えたんです」

「娘の言うことが一つ一つ嬉しい。成長したなあ」

ふいっと幸は白を右腕に抱えると、窓を飛び出た。

「行くぞ」

「うひやああ。白はまだ飛べませーん」

白の悲鳴が闇へ消えて行った。

「あ、白が」

不意に黒は目を開けたが、食べ過ぎて動けず仰向けに寝転がったままになっていた。

黒と啓子、部屋で大の字になって寝転がっている、ピザの早食い競争を二人でやった結果だ。

「どうした、黒」

男はしょうがないなと少し笑う。

「先生、白の悲鳴が聞こえたような気がしたんだ」

「なるほど。でも、そんなんじゃ、白も、それに三毛になにかあっても、助けに行けないぞ。啓子さんも黒も、本当に負けず嫌いだな」

男は視線を戻すとあかねを見つめた。

あかねの口が動いた、おはやおかえりを。

男は立ち上がると、おろおろしているあさぎに言った。

「二人は自業自得。あさぎ、ほっとけばいいよ」

男は笑いをこらえるように言った。

「先生」

啓子が仰向けのまま、男を見上げた。

「黒に勝ちました。なかなかのもんでしょ」

「お疲れさま、でも、あんまり無理しないようにね。年頃の女の子なんだから」

「ほーい」

男は静かに部屋を出た。

三毛は団扇を見つけて来ると黒の隣りに座り、扇いでやる。

「黒姉ちゃん、大丈夫」

「あんまり大丈夫じゃない」

黒が嬉しそうに笑った。

「反省してないね、体、壊すよ」

あかねも溜息をついて言った。

「啓子さんって、本当に子供っぽいなあ。普通、年下の黒ちゃんに勝ちを譲るでしょうに。むきになるんだから」

啓子はまんべんの笑みを浮かべ、黒の手を握った。

「なあ、黒。勝負は正々堂々としなきゃな」

「そうだよ、手加減なんかいらぬよ。今度は黒が勝つよ。あしたは手巻き寿司だ」

「うっ、今は食べ物のこと、考えたくない」

啓子は苦しそうに言うと、大きく深呼吸をした。

「あさぎさん、お水ください」

「確かに筋肉が肥大して、心臓の動きを押さえようとしているんだけど」

白は幸が次々と、まるでドミノ倒しのように倒して行った、その最後の一人を、ひざまずき、顔を寄せて見ていた。仰向けになり、息が荒く、それでいて、心臓の鼓動が鈍い。母さんとは、顔を上げると、幸の後ろ姿、特上と称した、年配の男に、間合いを開け、あれは、にいいっと笑みを浮かべているに違いない。

白が呟くように言った。

「早くしないと、この人、死んじゃいますよお。母さん」

「白、この人を俯せにきなさい」

男は倒れている黒服を見下ろし、白に声をかけた。

「は、はい」

慌てて、白は黒服の肩と腰に手を差し込み、そっと俯せにする。

「心臓の下、裏側の、ほら、ちょっと下に痣が出来ているだろう」

「はい」

「これを緩めればいいよ」

白が慌てて、痣に両手を合わせ摩る。黒服の息が穏やかになった。

「あ、先生、どうしてここに」

「ん・・・、黒がね、白の悲鳴が聞こえたっていうもんだからさ」

男は吐息を一つ漏らすと、幸を眺めた。

「幸がいじめられていたら、どんな相手であろうと、叔父さんは立ち向かって行くけれど、逆の場合はどうしたらいいんだろうって思うよ」

「あの、母さんは」

男はそっと笑みを浮かべると、少し寂しげに白に言った。

「幸には叔父さんの血が流れている、叔父さん、とっても、悪い奴だからさ、今の幸を見てみると、若かった頃の乱暴だった自分を思い出すよ。幸をああいう性格にしてしまったのは叔父さんの責任なんだよ」

「叔父さん……」

白は男の哀しい眼差しに口ごもってしまった。

「叔父さんは、あと数年しか生きていられない、その時は、白、幸を頼むよ」

男は立ち上がると、ゆっくり二人に向かって歩きだした。

幸の前に立つ黒服の総領は、幸の後ろに、一瞬、笑みを浮かべる男の姿を見た。

総領が驚いて言った。

「お前は無の縁者か」

「ん……。ああ、娘だ」

「そうか……」

総領は諦めたともいうように、両手を上にあげた。

「随分、昔の話だ。無と二度だけ、仕事をしたことがある。あいつには儂が束になって掛かって行っても、歯が立たない。全面降伏だ。ただ、すぐには殺さないでくれ、やり残した仕事があるんだ」

「殺すつもりはないよ」

感情を抑えて言う。

「後ろの娘に叱られてしまうからさ」

幸は背を向け、後ろの状況を確認した。

「全員、娘が助けたようだ」

幸はもう一度、総領に向き直り、言った。

「あんたに依頼した奴らにも伝えてくれ。あんたらに加担するつもりもなければ、鬼に味方するつもりもないってな。ましてや、国がどうなろうと一切、関わるつもりはないってな、ようはそういうことだろう」

「そうだ」

「なら、話は終わった。帰ってくれ、親子水入らずの旅の途中なんだ」

「委細、承知した」

総領の姿が消えた。

幸が振り返ると、倒れていた連中の姿も消えていた。

幸が背を向け、白を見る。白は立ち上がり、瞬きもせず、幸を見つめていた。

「お疲れさま、白。一つ、難しいのがあったけはずだけど、なんとかあったようだな」

幸がそっと笑みを浮かべる。

「先生が来てくださいました、背中を筋肉を緩めればいって教えてくださいました」

「え、お父さん、何処」

白が泣きそうになりながら叫んだ。

「先生は、幸が乱暴になってしまうのは、自分の責任だ。幸に申し訳ないっておっしゃいました」

幸は惚けたように、口を開け、膝から崩れた。

「お父さん・・・」

そして微かに呟く。

「ごめんなさい」

白は幸にかけよると、大声で泣いた。

「あの、先生、いいかな」

襖の向こうで、黒が男に声をかけた。

「どうぞ」

男が声をかけると、襖が開き、黒が男の部屋に入ってきた。

男は書いていた書類をまとめ、ファイルに綴じる。そして、棚に戻すと、椅子を回し、振り返った。

「お腹、大丈夫か。そうだ、体重を測っておけばよかったな」

男は笑みを浮かべたが、黒は真剣な眼差しで男を見つめていた。

「なんだ、しょうがないなあ。特別だぞ」

男は引き出しから即席麺を出す。

「あさぎに叱られないよう、隠れて食おう」

黒が目を輝かせた。

「いやっほう。先生、お湯を用意してくるよ」

黒は嬉しそうに声をあげたが、はっと気づいたように男に言った。

「そうじゃないよ、先生」

「え、違うのか」

男は黒に椅子を勧めると向かいあって座る。

「あの、先生・・・」

「言ってごらん、どうぞ」

黒はごくっと息を飲み込んだ。

「先生の武術を教えてください」

「うーん、黒はもう十分に強いぞ。この家を襲ってきた奴ら、十人くらい、黒が倒したんだろう。倒れているのを見たけど、かなり強そうな奴らだったよ」

「でも、母さんは五十人くらい、息も切らずに倒した、まるでドミノ倒しの波が来たみたいに敵が、次々と倒れて行ったんだ」

黒が男を見つめた。

「十人くらいで息を切らしていたらだめなんだ」

男は溜息を漏らすと、黒に言った。

「幸に聞いたか、どうやって五十人を倒したのかって」

「母さんは手を振って歩いていただけだって言った」

男は笑みを浮かべた。

「幸らしい言い方だな。感覚的にはそうなんだけどね」

男はしばらく黒を見つめていたが、やがて口を開いた。

「幸が旅に出る前、叔父さんにね、黒に教えてやって欲しいと言ったんだ、ある動きをさ。でもね、教えるには黒に約束をしてもらわなきゃならない」

「約束・・・」

「誰にも教えないということ、もちろん、白澤さんや白に三毛にもだ。約束を破ったら叔父さんは黒を殺すし、そうなれば、幸は苦しんで自分自身を殺すだろう。三毛も白も、みんなばらばらになってしまう。それでも、叔父さんは黒を殺すし、動きを知った者も殺しに行くよ」

黒は表情をなくし、男の眼をじっと見つめた。

「すぐに返事をしなくても良いよ、じっくり考えなさい」

男は笑みを浮かべた。

黒はしばらくの間、俯いていたが、すっと顔をあげ、笑みを浮かべた。

「黒は誰にも言わないって先生に約束します。だから、教えてください」

男は黒の笑みに、並ならぬ決意を見た。改めて、男は黒や白に三毛が、ここに来るまで、どんな生き方をして来たのか、どれほど、今を大切にしているかを思う。

男は深く溜息をついた。

「黒は叔父さんが無くしてしまったものを、しっかりと持っているのかもしれないな」

男は呟くと、左手を黒の額に添えた。一瞬、黒がうっと声を漏らす。しばらくして男は黒の額から手を戻して言った。

「最初から覚えようとしたら、十年は掛かる。だから、叔父さんが修行して来た分の記憶を黒に転写した。そして、記憶に障壁を作って、外からは見えないようにした」

「わかるかい、黒」

「わかります」

「なら、明日から練習しよう。記憶と体の動きを擦り合わせていかなきゃならない。今晚はもう寝なさい。発熱してしまうかもしれないからさ」

黒は頷くと、初めて、黒は自分から男の手を握った。

「ここで暮らすことができ、本当に幸せです。先生、ありがとう」

一瞬、男は驚いたが、すぐに笑みを浮かべ頷いた。

「こちらこそ、ありがとう。毎日がとっても楽しいよ」

黒はぎゅっと男の手を握り締め、そして、手を離す。

「お休み、黒」

「先生、お休みなさい」

「即席ラーメンはちゃんと、机の引き出しに残しておくよ」

黒がにっと嬉しそうに笑った。

「待ってよ、白」

幸が白の袖を引っ張る。

朝まだき、人影のないこの時間。この角を曲がれば家が見える。幸は、必死になって白を止めていた。

「母さん、一週間ですよ、家を出て。早く家に帰って、白はくつろぎたいです」

「でも、でもさ」

幸はまだ、ホテルでの男に見られた自分の後ろ姿を気にしていた。

「気持ちの整理がな。だって、お父さんに見られてさ、きっと、悪い娘になってしまった、って思っているよ」

「なら、ごめんなさいと言えればいいと思います」

「うわあ、白、冷たいよ」

白が長い吐息を漏らす。

「本当に母さんは、先生のことになると、とっても子供なんだから」

「まっ、とにかく家に入りなさい。こんなところで騒いでいないでさ」

男はよいしょと幸を両手で抱きかかえた。

「うひゃあ、お父さん」

「幸は面白い娘だ」

男が笑った。

「白、お疲れさま。うん、ちょっと表情が大人っぽくなったな。活法が性にあったようだね」

「はい、ありがとうございます」

「黒や三毛も心配していたよ」

白がそっと嬉しそうに笑みを浮かべた。

三人は家に戻ると、男は幸を降ろした。

「うひゃあ、家だ」

幸が寝転がってばたばたと泳ぎ出す、そして、仰向けになると大の字になって寝転がってしまった。

「母さんはなあ・・・」

白が溜息をついた。

「白姉ちゃん」

三毛があたふたやってくると、白に抱きついた。

「お帰り、白姉ちゃん」

「ただいま、元気にしてた」

「うん」

三毛が笑顔でうなずいた。

「黒姉ちゃんは梅林で修行。啓子さんとあさぎ姉さんとあかねちゃんは、畑で収穫しているよ」

男はデジカメと三脚を持ってくると、幸に声をかけた。

「幸、起きなさい。写真を撮ろう」

「え、写真」

「ああ、家族写真だ、もうすぐ、佳奈さんと洋品店のおばさんも来るよ」

幸は跳ね上がって起きあがると、満面の笑みを浮かべた。

「びっくりした。いいの、お父さん」

「いいよ」

男がうなずいた。

「なんか、嬉しいなあ」

少し、幸が涙ぐんだ。

「ありがとう、お父さん」

「こちらこそ、ありがとう」

男は静かに笑みを浮かべた。

そして、思う。少しでもこの幸せが長く続きますようにと。

朝まだき、空気がしんと静まり返っている。

男と黒は、朝の空気の中を梅林の奥深く、ゆっくりと歩いていた。男の片手には、新しいコピー用紙の束がある。

「黒、この辺でいいだろう」

男が立ち止まると、左手を上げ、手のひらを空に向ける。男の手の上に、水球が現れた、その水球はゆっくりと上昇しだし、弾けた。

「水の結界を張った。誰も近づけないようにね」

黒が驚いたように声を出した。

「先生も母さんも呪文唱えずにどうして出来るの」

「幸は説明してなかったかな」

黒が頷いた。

「呪文には二種類ある。幸が清めで詠う寿ぎ歌のように、特定の音の響きとリズム、それ自体が力を持つ呪文。もう一つは神とかのね、力を貸してくださいと依頼するための呪文だ」

「本家の術師達も普通に呪文を唱えていたよ」

「昔は本家にも呪文を唱えない術師がいたんだけどね」

男は地面にあぐらをかくと、紙の束を隣りに置いた。

「力を借りるのでもない、神に憑依されるのでもない、瞬間的に、自分が神様そのものになってしまえば、呪文を唱える必要がない。ただ、問題は人間の体には負担がかかりすぎるってことくらいだな」

「白が言ってた、先生は長く生きられないって言ってたって」

「若い頃、無茶し過ぎたのさ。さて」

男はコピー用紙を一枚取ると、右の手のひらに載せた。

「黒の頭の中には入っているはずだ」

男が黒に笑みを浮かべると同時に、その手のひらに載せた紙が半分に切れ、男の手のひらから落ちて行った。次に男は紙を頭に載せた。滑り落ちるように紙が二枚に別れ落ちて行った。

「呪術ではない、純粹に体術、体の微細な動かし方で、斬るという働きを生みだす。わかるだろう、誰もがこんなことができるようになったら大変だ、うっかり握手も出来ない」

男は笑うと、黒に紙を一枚手渡した。

黒は神妙に紙を受け取ると、そっと、手のひらに載せた。男は立ち上がると、その紙を上からのぞき込んだ。

「なかなかね、理屈はわかっていても難しいものだ」

「先生」

「ん・・・」

「先生、死なないでください。母さんが悲しみます、黒も悲しい、みんな、泣いてしまいます」

男がふっと笑みを浮かべた。

「ありがと。黒に泣かれたら大変だ、おじさん、頑張るよ」

幸は白を部屋の真ん中に立たせると、じっと見つめながら白の回りを廻る。三毛も隣りで不思議そうに幸を眺めていた。

「母さん、何ですか。急に」

あかねがふとそんな様子に気づき、部屋に入って来た。

「ああ、ちょうどいいや。あかねちゃん、白は何年生に見える」

「え、白さんですか」

「うん、あかねちゃんと同じくらいかな」

「ですね。背丈、顔付き。白さんくらいの子、多いですよ」

「なら、中学二年生にしよう」

幸はぼおっと眺めていた三毛に近寄ると、

「三毛は小学六年。なら、黒は中学三年ってことにするかな」

「どうしたんですか、幸さん」

あかねが不思議そうに尋ねた。

「武術も一通り教えたし、次は学校へ通わせようかってね、思ったんだ。それで、見た目の年齢に合わせて日本国籍を取らせようって思う、真っ当な方法じゃないけど」

幸はいたずらっぽく白に笑いかけた。

「白、大学の医学部に入って医者になってみるか」

「え・・・」

茫然とした表情で白は幸を見つめた。

「本当にいいの」

幸が柔らかく笑みを浮かべる。

「武術や呪術の練習は欠かしてはだめ、自分の身は自分で守れるようじゃないとね。その上で、勉強をして、生命を救う仕事をしたいというなら、それは有りだ」

幸は突っ立ったままの白の前で足を崩して座ると、顔を上げ、真っすぐに白を見つめた。

「武術や呪術を教えたのは、身を守るためだ。白や黒や三毛を、使って何かをしようなんてことは全く考えていない。家族だから、一緒に暮らしている、大切だから、こうして、一緒に生きているんだ。わかるかな、白」

白は言葉が出ず、ただただ、うなずいた。幸は笑みを浮かべると、今度は三毛を見つめた。

「三毛はどうする」

「そんなの、思いつかないよ、母さん」

「思いつかない、それも有りだよ」

幸は立ち上がると、梅林の方向に目を向ける。

「黒はどうするのかなあ」

「先生、切れた、切れたよ」

黒が驚いた声で男に言った。

「なかなか優秀だな」

男は切れた紙の断面を睨んだ。

「少しざらついているけれど、でも、綺麗に切れている」

黒が嬉しそうに笑った。

次に男は小脇にコピー用紙の束を抱え、黒から三メートルほど離れた。

「紙を黒に向けて飛ばすからね、しっかり、切るように」

「はい」

黒が元気良く答えた。

男が紙を一枚取り出す、それをふわっと地面と平行に浮かせた。そして、とんと紙の後ろを指先で押す。すいっと紙が空を滑って行く。黒がそれに合わせて、右半身に構えた。右手で上段、左手で中段を守る。すっと紙が黒の右手の寸前で二つに切れ地面に落ちた。

「要領は飲み込めたようだね。なら、連続して攻撃するよ」

黒が頷くのを確認して、男は次々と、白い紙を繰り出す。そして、黒の寸前で、幾つもの裁断された紙が渦を成して行く。

黒に目に見える動きはない。しかし、黒の微細な動きに呼応して空気が小刻みに震える。

男は手元に残った紙が十枚、確認すると、まるで空中に書類棚があるかのように、すっすっと紙を上から下へと並べて行く。

「十枚同時に行くぞ」

「はいっ」

黒が鋭く答えた。

男が紙の後ろを手のひらで押した。

ふわっと十枚の紙が黒の頭の上から、足元まで斬り込むように飛んで来る。黒がうっと声を漏らした。

紙が一枚、黒の目の前、一ミリにも満たない距離で停まっている。男が紙の後ろを掴まんで笑っていた。

男は紙を手に戻して言った。

「九割がた大丈夫。あとは移動しながらでも使えるようになればいいな。もともと、多人数相手のものだからね」

「先生・・・」

黒が呟くように言った。

男がいたずらげに笑った。

「頭、斬られたら生きてないよな」

黒がそっと頷いた。

男は結界を解くと、涼しい風が流れ込んで来た。

「さてと」

男は呟くと、辺りに散らばった紙切れを拾い始めた。慌てて、黒も従う。

「あかねちゃんはね、真面目すぎるというか、潔癖症のところがあるからな。散らかっていたら叱られてしまうぞ」

「あかねちゃんが」

黒が男に聞き返した。

「あかねちゃんの気配が近づいているってことだよ」

男が笑った。

おおよそ、紙切れを二人がまとめ終わった頃、あかねが大きな紙袋を持ってやってきた。

「おじさん、黒さん。お昼ですよ」

あかねが男に紙袋を手渡した。

「幸お姉ちゃんからです」

「ありがとう」

男は紙袋を受け取ると、紙切れを仕舞い込んだ。

「当分、メモ用紙には不自由しないな」

あかねは笑みを浮かべると、黒に声をかけた。

「黒さん、強くなりましたか」

「え・・・」

黒は一瞬、質問の意図が掴めず、きょとんとしてしまった。

男は、腰を落とすと、あかねに話しかけた。

「黒に教えてくれないかな、含みと流し。おじさんでは身長が違いすぎて教えづらいんだ」

「いいですよ」

あかねはあっさりとは答えと、黒の正面に立った。

「あかねちゃん、武術できるの」

黒が不思議そうに呟いた。あかねが楽しそうに、しかし、少し意地悪に笑みを浮かべた。

「黒さんたちには、鬼から助けていただいた恩があります。だから」

あかねが右足を数ミリ、前に送る。

「できるだけ手加減してあげます」

体中草だらけになる、息も絶え絶えとはこういうことを指すのか、黒は激しく息をし、ぎゅっとあかねを見つめた。

「黒さん、いい眼ですよ」

あかねはふらっと突っ立っているだけだ。

黒は一気に間合いをせまめると、一閃、あかねの左側頭部に右回し蹴りをいれた、最短距離を疾る突きのような蹴りだ。一瞬、黒はにっと笑うあかねの顔が視界一杯に見えた気がした。

青い空、あかねの右手のひらが柔らかく黒の顎を捉え、黒が背中から落ちた、後頭部を打たないよう、あかねの左手は黒の首筋を支えている。

「これが流しです。そして、さっきの黒さんの突きを溶かしたのが含みです」

あかねは黒の手を取ると、すっと立ち上がらせた。

「黒さんの筋肉、随分、参ってますね。これくらいにしましょう」

「ま、まだ、大丈夫」

男が後ろからすっと黒を抱え上げた。

「気持ちが折れてなければ良し。あさぎに遅いって叱られるぞ」

「で、でも」

「黒はあかねちゃんの動きをしっかりと見ただろう、あとは、どうすれば同じ動きができるかしっかり自分で考えなさい。おじさんの教えた動きとあかねちゃんのを合わせれば、どんな動きになるかわかるか」

黒がごくっと息を呑んだ。

「わ、わかるよ。かあさんと同じ動きになる」

男が笑みを浮かべた。

あかねが黒の顔を覗き込んだ

「黒さん、しっかりね」

「う、うん。あかねさん」

あかねがくすぐったそうに笑った。

「ちゃんていいですよ」

「先生、見回りに行こうよ」

黒が夕食後、男に言った。

「でも、寒いし。行くのやだなあ」

男がくすぐったそうに笑う。

「もお。そんなことじゃ、町を守れないよ」

怒りだす黒が面白くて仕方ないと男が笑った。黒達三人がここに住むようになって一年が過ぎた。裏社会での術師と鬼の戦いは既に鬼の優勢となり、一般の人達には知らされていないが、術師の目を擦り抜けては鬼達が暗躍し、人々をさらってその血肉を食らっていた。ようやく、この頃になると、一般の人達も鬼を目撃することとなり、嘘か真かと戸惑いながらも、夜間の外出を控え、また、昼間でも一人で歩くことを避けるようになっていた。

男が台所を覗くと、白があさぎを手伝って洗い物をしている。幸はあかねに数学を教え、それを三毛が覗き込んでいた。

「本当にありがたいことだな」

男は小さく呟くと立ち上がった。

「よし、行くか、黒」

「うん、先生」

「黒姉ちゃん、三毛も行くよ」

三毛は立ち上がると、ぱたぱたと黒の元へ走って来た。

「おとうさん、危ないことしちゃだめだよ」

幸が心配げに立ち上がったが、男は手で制すると笑みを浮かべた。

「大丈夫さ。黒と三毛が居てくれたら安心だ」

夜九時を少し回った頃、以前ならたくさんの車が行き交い騒がしかった表通りも、まばらに車が通るだけとなり、人や自転車は皆無だ。

「黒。駅前の商店街まで行こうか」

「うん。先生は黒が守ってあげるよ」

「それは心強いな」

「先生、三毛も先生を守ります」

「そうか。三毛も強くなったものな」

「ええ、呪術も使えるようになりました」

「一人前だな」

男が三毛の頭を撫でると、嬉しそうに三毛が喉を鳴らした。

冬手前の夜風は冷たい。黒と三毛は男の両脇に並び、ぎゅっと両手で男の腕を抱えるように歩いて行く。

男は初めて気が付いた。

「なんだ、二人とも随分と背が伸びたなあ」

「三毛は一五〇センチ、黒は一六〇あるよ。白はね、ちょうど間の一五五センチ」

「そうか。初めて会った時はおじさんの腰くらいだったのになあ」

「成長の度合いが人とは違うみたいですよ」

三毛が男の顔を見上げた。

「そうか、なら、来年は三メートルくらいになっているかもな」

男が笑うと、黒も一緒になって笑った。

ふと、角を曲がった先に男は人影を見つけた。

微かな街灯の明りにOL姿、会社帰りの女性だということくらいはわかる。

「これは珍しいこともあるもんだ」

「先生。一人歩きは危ないから、声をかけてくるよ」

黒がそう言って走りだそうとする、それを男が止めた。

「黒、送って行きますとか絶対言っちゃだめだよ。まずは、こんばんは、どうして一人で歩いているのですかって尋ねること。いいかい、わかったかな」

「先生がそう言うなら、そうするよ」

男の笑みを確認し、黒が女に向かって走り出した。

「先生、どうして、黒姉ちゃんに念を押したの」

「ん……。すぐにわかるよ」

いたずらげに、男は笑った。

「三毛、すべての存在はそれ固有の振動数を持っている。それを読み解くことができれば、顔を見なくても誰だか、簡単に解るのさ。つまりは送って行くには遠すぎるよ」

「うわああっ」

一瞬の悲鳴が聞こえた。

女の顔を見た黒は、悲鳴をあげた後、脚を震わせ今にも倒れそうになっている。

「しっかり。ぐっとお腹に力を入れなさい」

男は歩きながら、黒に声をかけた。

「左足、半歩前、相手の目の下辺りをぎゅっと睨みつける、気持ちで勝ちなさい」

三毛は何が起こったのかわからず、黒へと走り出しかけたが、それを男が止めた。

黒は歯を食いしばると、女を睨みつけた。

男は黒のすぐ隣りまで来ると、嬉しそうににっと笑った。

「かっこ良かったそ、黒。さっ、おじさんの後ろに隠れな」

まさしく、脱兎の如く、黒は男の背中に隠れると息喘いだ。

「かぐやのなよたけの姫。鬼族の国は三つに分かれていると聞きますが、そのひとつの女王が何ゆえ、こちらに」

男がさしてかきこまった風もなく、女に声をかけた。

「何処かで会ったかな」

「ええ、一度」

男は自分の首の前で、人差し指をすっと横に切った。

「まだ、少し、傷が残っているようですね」

いきなりなよたけの姫は男を睨みつけると、間合いを開け、数歩下がる、そして右腕を鋭く振った。空気が裂ける。刃、銀色の輝きが男の顔を貫く。

「先生」

黒が叫んだ。

男は左手の甲で刃が貫くのを制していた。

「斬る動作は同時に防御にもなる。黒、便利だろう」

男は笑うと、ぎゅっと目を瞑って縮こまっている三毛に声をかけた。

「三毛。おじさんの頑張っているところを見ておいてくれ」

はっと気づいたように三毛が顔を上げた。

長細い帯のような刃が、なよたけの姫の手を離れ、男の手を貫こうとしていた。

「自走式刃帯儀、元はただの絹の帯だ。こんな由緒ある技に出会うのは久しぶりだな」

いきなり、帯の反対側が繰り出し、螺旋に男の首へと、いや、ほんの数ミリ逸れ、夜陰を引き裂いた。

「黒、三毛。良く覚えておきなさい。全ての存在は特定の振動を持つ。その振動をフーリエ解析により、サイン波に分解する。それを利用して、擬似振動数を作るんだ、そうすれば対象を共鳴させ、こちらが充分強ければ、そいつを操ることが出来る。でも、弱ければ逆転されてしまうけどね」
なよたけの姫が目を見開いた。雑音、意味不明の音がなよたけの姫の口から発せられる。

「これは中間言語による呪文の詠唱。人の言葉での呪文の詠唱は、どんなに頑張っても、本来の効果の七割程。でも、中間言語なら九割は期待出来る。今夜は良い勉強になるなあ」

男の解説に黒と三毛の二人は、恐怖も忘れ、耳を傾けた。

「でも、この辺りが焦土になっては大変だな」

ふっと男の姿が前方に倒れかけた瞬間、男はなよたけの姫の懐に入り、右手で首と頭の狭間を抑える、一瞬、なよたけの姫が気絶したところを、その膝の裏を払い、なよたけの姫に尻餅をつかせた。

「わしの負けだ、殺すなら殺せ」

すぐに意識を取り戻したなよたけの姫が男に悪態をついた。

「私は勝ったから殺す、負けたから殺されるというような、難儀な世界には生きておりませんので、困ったな」

その瞬間、ぐううとなよたけの姫のお腹が鳴った。恥じ入るように俯く。

「高貴な人は大変だ」

男はふっと商店街の方角を見つめ、そして黒と三毛の二人に声をかけた。

「いま、佳奈さんに連絡をとったよ。商店街の中華屋さんが、まだ、開いているらしい。ラーメンでも食おう」

「ほんと、いいの」

「餃子もいいですか」

「いいよ。でも、幸やあさぎには内緒だぞ」

「やっほお、ラーメン、ラーメン」

「と、言うことで、黒、三毛、二人でなよたけさんに肩を貸してやってくれ」

「ええっ」

踊っていた二人が硬直した。

極度に緊張した黒と三毛が、なよたけの姫に肩を貸し、左右並んで歩く。その後ろを男が歩いていた。

肩を預けたまま、なよたけの姫がにいと黒に笑いかけた。

「美味そうな子猫だのお。頭を半分に割って、脳みそを匙ですくうて食せば、どれほど美味だろう。滋養もあるであろうなあ」

「先生」

半泣きになりながら、黒が叫んだ。

「頑張れ、黒。根性を見せてみろ」

男は楽しそうに答えた。

「そちらの三毛猫は、腕と足を網で焼いてたれをつければ絶品じゃ。肉も柔らかそうじゃ」
三毛が息を飲んだ。

「妹はだめ」

黒が叫んだ。

商店街に入り、中華店の前、佳奈が心配そうに三人を待っていた。

「先生、なんだよ。急にさ」

「悪いね、おもしろい人と会ってさ、一緒にご飯を食べようって話になってね」

佳奈は、二人に支えられているなよたけの姫に気づくと、男に言った。

「どうしたんだい、この人。具合悪いなら、うちの車で病院、連れて行こうか」

「腹一杯食えば元気になるさ」

男は笑った。

五人は連れだって中華店に入ると、テーブルについた。

「佳奈さん、この期時世だ、帰らないと、家の人、心配するだろう」

「大丈夫さ、明りのあるアーケードの下だし、それに先生なら鬼だってやっつけてしまうだろう」

「勘弁してくれよ、争いは苦手だよ。それより、すぐにできるものから頼もうかな」

「まずはビールじゃ」

いきなりなよたけの姫が浮き浮きと声を上げた。

「亭主。まずはビール二本。それから、大至急、餃子を十人前、持って参れ」

「はい」

このところの鬼騒動で客足がさっぱりだったのだろう、久しぶりの上客に、亭主は笑顔を浮かべた。

「黒、三毛。好きなもの、頼みなさい」

「ラーメン定食とからあげ」

黒が嬉しげに声を上げた。

「な、三毛はどうする」

黒が楽しそうに笑った。食べ物を前に、それまでの恐怖をすっかり忘れてしまったようだ。

「それじゃ、天津飯をお願いします。先生はどうしますか」

「そうだな。晩御飯を食べた後だし、みんなでつまめるものがないな」

ふと、男は入り口を眺めた。

「黒、任せたよ。適当に頼んでくれ。おじさん、ちょっと、外に出る、すぐに戻るからさ」

男が外に出ると、幸が少し俯いて立っていた。

「お父さん、お財布、持って来たよ」

「ごめん。小銭しか持ってなかったよ。父さん、だめだなあ」

幸が少し顔を上げる、涙を流していた。

いきなり、幸は男にしがみつき、ぎゅっと顔を男の胸に押し当てた。

「お父さん、力を使わないで、命を削ってしまわないで。幸はずっと、ずっと、お父さんと一緒にいたいよ」

「ありがとう、幸」

男は幸をそっと抱き締めた。

「幸は泣いている顔も可愛いけれど、父さん、幸の笑顔が一番好きだ。だって、笑顔は幸が幸せだってことだからさ」

男は幸をぎゅっと力強く抱き締めた。

「だから、ごめんね、幸。泣かせてしまって」

しばらくして男が中華店に戻ると、既にテーブルの上はビール瓶一ダースと料理で一杯になっていた。

「おや、佳奈さんも飲んでいるのかい、亭主殿に叱られるよ」

ごくりとなよたけの姫がビールを飲み干し笑った。

「お前の娘たちは未成年だからな、佳奈に相手をしてもらっておる。酒は一人で飲んでおってもつまらん」

「なんだか、なよたけさん。すっかり馴染んでおられるようで」

男が困り顔で言った。

「佳奈は気風のいい、姐御肌のいい女じゃ」

「何言ってますよ。なよたけさんだって。いい女ですよ」

酔っ払い二人がお互いを誉めあっている、男は溜息をつくと椅子に座った。

黒は食べてさえいれば幸せなのか、嬉々とラーメンを啜っていた。

「先生。黒姉ちゃんが先生の方で春巻きや春雨のサラダを頼んでいました」

「そうか。おじさんはあっさりしたのがいいから、ちょうどいいな。そうだ、お土産を持って帰らないと、白に叱られてしまうな」

「あとで持ち帰りを注文しましょう」

三毛はそう言うと、天津飯を美味しそうに食べ出した。しかし、ふと、男を見つめて小さく呟いた。

「ごめんなさい」

男は面白そうに、そっと笑みを浮かべた。

「三人とも、あかねちゃんを救い出すときに、なよたけの姫に散々脅されたようだな。まだ、鬼の中では、話のわかる人なんだけどね。なよたけの姫は角のない鬼だし」

「先生」

三毛が食べるのをやめて男に話しかけた。

「鬼っていったい何なんですか」

「それは難しい問題だな。人とは何なのか、人の定義と同じくらいめんどくさいな。ただ、昔話のように、鬼は人間と同じように二足歩行で、角があって、というのは、正確ではないし、また、鬼は一つの種でもない。あえて言うなら鬼の世界に住んでいる人達ってことかな」

三毛が頷いた。

「十メートルを超えるような大きな奴から、なよたけの姫のように人とまったく変わらない鬼もいる、ああ、でも、共通して鬼は性格が悪いけどね」

「ああ、何か言ったか」

なよたけの姫がビール瓶を片手に男に声をかけた。

「鬼の解説ですよ。なよたけの姫は性格が悪いと、この子に教えておきました」

「どうも、お前は正直すぎるな。そういう時は、言葉を濁しておけ」

男がくすぐったそうに笑った。

「性格が悪いのは否定なさらない」

「長く生きて、性格が良いままのわけあるか」

「月の人として、かぐや姫のまま、月にお帰りになればよかったのに。好いた相手が鬼であったとはね」

ふいに興味深そうに、なよたけの姫が男をじっと見据えた。

「ただのエキストラのような振りをしているが、お前、どこまで知っておる」

「わりと・・・」

にっといたずらげに男は笑った。

「ええっ、なよたけさんってかぐや姫なんですか」

いきなり、佳奈が声を上げた。

「そうじゃ。当時の帝もわしにぞっこんじゃった。懐かしいのお」

「なよたけさん、綺麗ですもんねえ」

「いやいや、佳奈も美人じゃ。これだけの美人はそうはおらんぞ」

「いやですよ、美人のなよたけさんにそんなこと言われたら照れてしまいますよお」

男は三毛に呟いた。

「酒は飲んじゃだめだぞ。大人になってもね」

「はい。必ず」

中華店のドアが開いた。

「先生、手伝いに来たよ」

恵子が店に入って来た。

「やあ、恵子さん。幸が頼んでくれたようだね」

恵子は三毛の隣に座った。

「酔っ払いと荷物で大変だろうからって」

「まっ、そうだね。佳奈さんは家に送って行って、なよたけさんにはうちに泊まってもらうかな」

「なよたけさん・・・」

えっと、息を飲み、恵子は酔っ払いの一人を見つめた。

「う、うわっ。あれ、かぐやのなよたけの姫じゃないですかっ」

椅子から飛び上がると、恵子は男の後ろに隠れた。

「特S級の鬼ですよ。どうして、ここに」

「さっき道であってさ、一緒に飯食いますかってことでね」

「先生」

「ん」

「友達を選んだ方がいいですよお」

男がくすぐったそうに笑った。

なよたけの姫は足元おぼつかなく立ち上がると、ゆらゆらと歩き、恵子に近寄って、その顔をのぞき込んだ。

「お前はわしのことを知っておるのか」

「は、はいっ」

「ふむ、その態度、確かにそうじゃろうな」

なよたけの姫はぱしっとテーブルを叩くと男を睨みつけた。

「わしのことを知っておる人間は普通、こういう態度をとるものじゃ、恐れおののいて命乞いをする。お前はなんじゃ。あまりにも平気な顔をしておるから、わしも、己がそう云う存在であることを見失っておったわ」

男はいたずらげに笑みを浮かべた。

「威嚇したり、相手を押さえ付けようという関係よりも、この方が楽しいでしょう」

一瞬、なよたけの姫は呆れたように男を眺めたが、
「まあ、そうではあるわな。しかし、調子が狂うのお」
小さく呟いた。

顔面蒼白の恵子の後ろを、両手に持ち帰りのギョウザや空揚げの袋をもち、浮き浮きと歩く黒。
三毛は男の横を、その上着の裾を握って歩く。佳奈を自宅に送り届けた後、五人は夜道を家路へと歩いていた。

恵子が背負っているのはかぐやのなよたけの姫。決して重くはないのだが、大量の脂汗をかいていた。

「お前の肉は堅そうだのお」

「は、はい。食用には適しておりませんです」

「しかし、その耳たぶは柔らかくてうまそうじゃ」

なよたけの姫が意地悪く笑い、恵子に囁いた。

「どれ、ひとつ、食してやろうぞ」

「か、勘弁してくださいっ。先生」

恵子がたまらず叫んだ。

男は楽しそうに笑うと、少し歩を早め、なよたけの姫の後ろ頭を軽くこつんと叩いた。

「うちの大事な娘達に変なトラウマを刻まないでください」

なよたけの姫は頭に手をやると、小声で拗ねたように文句を言う。

「この一千年以上、頭を叩かれたのは初めてじゃ」

角を曲がり、家が見える。

幸と白が家の前で出迎えていた。

黒は駆け出すと白に声をかけた。

「白。お土産だよ。いっぱい、買ってもらったよ」

「お姉ちゃん、お帰り。あっ」

白が空を見上げた。

なよたけの姫が虚空に飛ぶ。標的は幸。幾十もの自走式刃帯儀が分厚い束になり闇を白くつんざいた。

待ち構えていたように、幸が唇の端を歪め笑う。

ふいっと幸の全身の力が抜け体が前に倒れる、地面に倒れる瞬間、爆発したかのような勢いで刀を抜き、一閃、なよたけの姫が放つ全ての刃帯儀を粉微塵に切り裂いた。

幸の姿が消えた、着地したなよたけの姫の喉元に、既に幸は刃を重ねていた。

なよたけの姫がごくっと息を飲む。

「お客様、ご冗談はほどほどに」

嬉しくてたまらないと、幸はにいいっと笑った。

「わしの負けだ」

幸は笑みを浮かべたまま、ゆっくりと頭を横に振る。

「もっと可愛らしくどうぞ」

突き刺すように、なよたけの姫を見つめる。

「ご、ごめんなさい」

引き込むように、口元に幸は笑みを浮かべ、なよたけ姫の耳元に顔を近づけ囁いた。

「どういたしまして」

幸は刀を消すと、男に声をかけた。

「お父さん、お帰りなさい」

「ただいま。なんだ、幸はなよたけさんと案外気が合いそうだな」

ふんと鼻を鳴らすと、なよたけの姫は少し俯いた。

「やっかみ半分でお前の娘を攻撃したが、まさか、手も足も出んとは思わなかった」

「やっかみですか」

「お前の娘が幸なのだろう。あかねは、わしの後継ぎよりも、幸という女と暮らすのだと一歩も引かなかった」

「どうしたの、あかねちゃん」

あさぎが落ち着かずにいるあかねを心配して、声をかけた。

あかねには珍しく、狼狽して、台所と居間を行ったり来たりする。

「なんでもない・・・、というか、なんでもあるんですけど」

いきなり、あかねは納戸を開け入りかけたが、頭を振り、台所に戻ると、テーブルについた。

「はっきりさせなきゃ」

あかねは椅子に座ると大きく深呼吸した。

「はい、どうぞ」

あさぎはコップに水を入れ、あかねに差し出した。

「ありがとう、あさぎ姉さん」

「ただいま」

黒の元気な声が玄関口から響いた。たたと走る音。黒が台所へと飛び込んで来、テーブルに包みを置いた。

「先生が買ってくれたよ。ギョウザ、シュウマイ、空揚げも」

あさぎは困ったように笑みを浮かべると、黒に言った。

「今晚は遅いからだめだよ。明日、食べよう」

「ええっ」

黒が泣きそうな顔であさぎを見上げる。

「ちょっとだけ、お願い」

「うーん」

「あさぎ姉さあん」

甘えるように黒は囁くと、上目使いに、じっとあさぎを見つめた。食べ物がかかった、こういう時の黒は、必死で、それがとても可愛い。あさぎは溜息をひとつつくと、笑みを浮かべた。

「本当にちょっとだけだよ」

「うん、約束する」

黒が紙袋を開けていると、なよたけの姫が入って来た。

あかねは椅子から立ち上がると、じとなよたけに姫を見つめた。

「あかねちゃん、なよたけさんと御飯食べたよ。とっても、恐いけど友達になったよ」

「こいつは、一緒に飯を囲めば打ち解けたと思いきよ、単純な、しかし、羨ましい性格だな」

なよたけの姫はテーブルを挟んであかねの前に立つと静かに頭を下げた。

「無理強いをしたこと、悪かったと思う。迷惑かけたな。すまなかった」

「なよたけの姫・・・」

「それを言って置きたかっただけじゃ」

なよたけの姫は踵を返すと、部屋を出ようとした。

「なよたけさん、一緒に風呂に入ろう」

幸は着替えを両手に抱え、顔を出した。

「なんだ、黒。まだ、食うのか。太るぞ」

「ちょっとだけ」

「困った娘だな」

幸は笑うと、なよたけの姫に言った。

「まだ降ろしていない下着だからいいだろう。風呂、沸いてるからさ。アルコール、抜いておかないと二日酔いになるぜ」

「湯は有り難いが、用事があるからな。帰る」

幸は着替えを椅子の上に置くと、なよたけの姫に言った。

「短時間だったから、あまり調べられなかった。なよたけさんの国、攻め落とされたんだらう。なら、ここで暮らそう。一緒に飯食って、一緒に働こう」

「なるほど、確かに親子だな」

なよたけの姫は呆れたように笑みを浮かべると、美味しそうに空揚げを食べる黒を眺めた。たっぷり空揚げにマヨネーズをかけている。

「こら、黒猫。本当に太るぞ」

なよたけの姫は軽く黒の頭をはたと、ひとつ大きく溜息をついた。

「絶望、命からがら逃げ出して、何もやる気がなくなって、気づけば、あかねの居る町に来ていた。このまま、野垂れ死にもいいか、長く生き過ぎたなと思っていたところに、間抜けにもこいつが、声をかけて来おった」

なよたけの姫は黒の頭、はたいたところを撫でながら笑った。

「飯食って、酒飲んで、佳奈と喋り倒した。すっかり元気になってな、だから、これから敵討ちに行くことにしたんじゃ」

「敵討ちに・・・」

「ああ、名前も知らぬ下女の仇を討たねばならん」

男が両手に反物を抱えてやって来た。

「幸。これをなよたけさんに渡していいかな」

「お父さん、それは」

「納戸の奥の柳行李に入れたままにしていた絹の反物だ。昔、本家から逃げ出した時、当座の費用にと、勝手にいただいたまま忘れていたんだよ」

「絹。あ、そうか……。お父さん、ありがとう」

幸は気づくと、男から反物を預かった。

「なよたけさん、剣の代わりに、これ使って」

幸の手渡す自然さに、思わずなよたけの姫は受け取ったが、改めて男と幸を見つめた。

「わしはこれを使って、お前達の類や、人を殺めるやしれんぞ。いいのか」

幸がにっと笑った。

「しらふのなよたけさんと戦えるのは楽しみだ」

なよたけの姫は幸の自然な表情に思わず笑みを浮かべた。

「綺麗な色だ、ありがとうな」

まるで子供のような、なよたけの姫の笑顔。はっと気づき、慌てて、なよたけの姫は表情を消したが、目ざとく、にいと幸が引き込むように笑みを浮かべた。

「白、三毛。なよたけさんを笑わせるぞ」

「はいっ」

元気良く、白と三毛が返事した。

最終列車、どうもこの路線は揺れが大きい。

会社帰りの男、コンパ帰りの学生、酔客。吊り革につかまる乗客はなく、座席の三分の二は詰まっている。

なよたけの姫の隣りに白、その隣りには幸が座っていた。

「あの女、啓子とかいう、別れ際にわしの肩を叩きおった、それじゃ、またね。などとほざきおって」

白は必死になって笑いをこらえていた。

「これほどの恥辱は初めてじゃ」

白は気持ちを落ち着かせると、両手でなよたけの姫の手を握った。

「いままでとても怖い方だと思っていました。ごめんなさい」

なよたけの姫は手を引きかけたが、その力を抜くと、ふんと鼻を鳴らした。

「わしは恐ろしい鬼じゃ。ただ、今夜は少しばかり調子が狂っただけじゃ。まずはあの男がいかん。あいつが元凶じゃ」

「今頃、先生、くしゃみをしているかもしれません」

「そもそも、あの男は何者じゃ。わしの攻撃を素手で止めおった」

幸が少し笑った。

「あたしの大切なお父さんであり、夫でもある。それ以外の修飾する言葉はないよ」

「ある程度の実力を持った術者の一覧は既に把握しておる、お前にしても、お前の父親にしても一覧には無かった」

「一覧に載せてもらえないってことは、実力が無いってことだろうな」

幸は笑うと、辺りをゆっくり見渡した。

「電車に乗ったのは正解だったなあ、余禄が付いてきた」

「花魁道中の儀が使えるれば、方違えなどなしに、鬼の世界に戻れるが、もう供の者もおらんからな」

「なあ、なよたけさん、白とあたしの他に、人はこの電車に乗っているのかな」

嬉しそうに幸が呟いた。

「この電車には人は乗っておらぬようだ。お前達を含めてな」

「何言ってるんだよ。あたしも白も人だよ」

前方を眺めながら、幸が囁いた。

乗客全員だろう、次々に三人を取り囲んでくる。他の車両からも、乗客がこの車両に移り込んで来、幸達とは、ほんの一メートルほどの距離を開け、一つの巨大な壁にでもなろうかと、乗客達がにやけた表情を浮かべブロックのように隙間なく固まって行く。

「お前達を巻き込んでしまったな。わしが何とかしよう」

「いや、心臓が無いとはいっても、元は人間たちだ。あたしにさせてくれ。白の勉強材料にちょうど良い」

白は何も答えない。既に恐怖と緊張で叫び出す寸前だった。なよたけの姫の手をぎゅうっと握り締めている。なよたけの姫はなだめるようにもう片方の手を白の両手に載せた。

「良く見ておけ、白。こういう戦い方もある」

幸はゆっくりと立ち上がり、微かに俯いた。

そして、ゆっくり幸が顔を上げた時、まさしく、天女、マリア、観音菩薩、慈愛に満ちた笑顔を幸は浮かべていた。醜く引きつった無数の顔顔、顔の壁に、清らかな笑みを浮かべる。

「子供達よ。心穏やかになさい。もう、苦しまなくて良いのですよ」

幸は中央の顔に焦点を向けた。

「子供達、とても疲れているのですね。心にいくつもの、とげが刺さっているのですね、母はわかります」

ゆっくりと中央の顔の表情が消え、その両方の眼から涙がこぼれて行く、まさしく、母と出会えた幼子のように。

「母が降臨したいま、もう、子供達よ、辛いことはすべて消えました。何もかも忘れ、ゆっくりとお休みなさい。明日の朝日を夢見、ゆっくりとお休みなさい。すべては許されたのです」

幸が緩やかに両手を広げる、まるで、全ての者達を抱こうとするかのように。

ゆっくりと壁が崩れて行き、重なるようにして、眠る人達。どれも安らかな表情で寝息をたてている。

幸は振り返ると、にっと笑った。

「ま、明日がどうなのかなんて知らないんだけどな。はは、な、白、美人は得だろう。白も美人になるぞ」

啞然とする白となよたけの姫。

「さ、詐欺だ」

二人して叫んだ。

最終駅、列車はドアを開けたまま、明かりを消した。まるで、列車までが安らかに眠るように。

三人はホームに降りると、線路に下り、そのまま、線路を元来た方向へと歩き出した。

「このまま、二キロほど、この速さで戻れば、わしの国の入り口じゃ」

「なよたけさん、敵討ちって具体的に何をするつもりなんだ。大量殺戮、一気にかたをつけるかい」

幸がわくわくしたように言う。

「これでも、わしは鬼の側じゃ、そういうことを言うな。わしはお前の弱点もわかっておる。好き勝手にするなよ」

「あたしに弱点。んなもん、あるかよ」

幸はなよたけの姫に振り向くと、にいっと笑った。

なよたけの姫は溜息を付くと、白に言った。

「愉快的な母親じゃのう」

白は困ったように笑みを浮かべた。

「いつもはとて素晴らしい母さんなんです。でも、先生から離れると、ああいうふうには」

「己のことをあたしと言い出したら、叱ってやってくれとあった」

「え」

「反物に挟んであった手紙じゃ」

なよたけの姫は封筒をひとつ取り出すと、幸に言った。

「あやつは、真、お前を大切に想うておるようじゃのう。呆れるほど、お前の幸せだけを願っておる。お前が普通に楽しく幸せで生きられるよう、己が死んだ後も、お前が家族と共に普通の日常を送って行けるよう腐心しておる。ありがたいものなの」

「お父さん・・・」

すすり泣きだした幸に、なよたけの姫が言った。

「泣くな。泣けば、あやつの思いを涙で流してしまうぞ。すれば、また、この繰り返しじゃ。泣くのを堪えて心に刻み込め」

幸は俯いたまま、うなずくと歯を食いしばった。

「手紙、読むか」

「いい」

幸が俯いたまま答えた。

「帰ってから読む、父さんに心配し過ぎだよって笑って言うから」

闇の中、淡く光を放つ白い霧が見える。まるで壁のように、霧が闇の中に浮かび上がる。

「満月が戦乱の後の故郷を白く照らし出しておる」

なよたけの姫は深い吐息を漏らすと、二人に振り返った。

「わたしにはもう、客人をもてなす力はない。つい、流れで同行してもらったが、敵は多いぞ。特に白、お前は戦には不向きじゃ。怪我では済まぬかも知れんぞ。正直なことを言うと、お前が死ねば、幸は全てを、世界すら葬るかもしれん、出来れば避けたい。わたしは、これでも、元は鬼の為政者だからな」

幸は真っすぐに、なよたけの姫を見つめた。

「なに言ってるのかなあ。なよ姉ちゃんは、もっと妹を信頼するべきだな。困った姉ちゃんだ」
にっと幸がなよたけの姫に笑いかけた。

なよたけの姫は不意に大声で笑うと苦しそうに息を吐いた。

「笑わせおる。なんと随分な妹ができたものじゃ」

ふと、なよたけの姫は真面目な顔になると呟いた。

「長く生きてると色々と思ひもかけないことがあるものじゃなあ」

なよたけの姫は気持ちを入れ替えるように、頭を振ると、二人に言った。

「よし。幸、白、ついて来い」

「うひゃあ、軍隊だ」

幸が小さく呟いた。霧から脱出した、三人の目の前に一個中隊はあるだろう、重火器を構えた兵士達はその砲口を三人へと定めていた。

「白。戦車もこっち向いてるぜ」

「幸母さん、喜び過ぎです」

白が緊張を隠せず震える声で答えた。

なよたけの姫を先頭に幸と白がいる。

「あれ、なよ姉さん。こいつら、自衛隊じゃないか。ってことは人間か」

なよたけの姫は、振り返らず、前方を睨みつけたまま呟いた。

「人の支配者層は、己らの保身のため、既に見切りをつけた、国民を護ることにな」

「ふうん、鬼による事件が増えたのはその所為か」

幸がたいして関心なさそうに頷いた。

そして幸は夜空を見上げると、ひとつ、指を鳴らす。呼応するように、小さな星が四つ生まれ、流れ星のように帯を引き、落ちて行く。

幸は視線を戻すと、小さく呟いた。

「まさしく鬼司令官だな」

なよたけの姫に向き合うように、軍服を身につけた鬼が現れた。人の身長も横幅に対しても一、五倍はあるだろう。

「やはり戻って来たか。かぐやのなよたけの姫。どうだ、根こそぎ民を殺されたその感想は」
見渡すと、国というよりも、時代劇に出てくるような田舎の風景だ。

「開国を拒絶した報いだな」

鬼があざけるように嗤った。

なよたけの姫は、表情の消えた顔を上げ、目の前の鬼を眺めた。

「貧しいが、楽しく生きて来た。電気と化石燃料と貨幣経済を拒絶する生活は却って寄り添い、
お互いを大切に生きることができた」

「貴様らがレアメタルの上で暢気に暮らしていたのが命取りとなった、そういうことだ」

なよたけの姫は、それ以上言葉を発することなく、ゆっくりと両手を肩の高さに広げた。

幸は察すると、白を片手に抱え、一瞬にして後方に退いた。

「下賤の鬼、わしを逃した、あの娘も殺したか」

鬼はにやっと笑うと、振り返る。直属の部下だろう、槍を鬼に手渡した。

鬼がかかげる槍の先に、血に赤く染まった少女の頭が、首から切り離され、突き刺さっていた。

「情に深い貴様のことだ、残しておいてやったよ。受け取れ」

鬼が槍を勢いよく振る。少女の首が飛んだ。

瞬間、幸は現れると、少女の首を抱え、手をその首に溶け込ませた。手を抜き、引っ張り出した黒い塊を戦車に向かって投げる。

爆風と轟音が辺りを震撼し、巨大な戦車を横転させた。

「なよ姉さん、あとはまかした」

幸が姿を消した。

「うおおおっ」

かぐやのなよたけの姫が咆哮が夜のしんとした空気を震わせる。幸は白を抱え、空に浮かんだ。

「本気のなよ姉さん、凄いな」

幸が呟いた。

無数の刃儀が鬼を兵士を切り裂いていく。

なよたけの姫は地面を飛ぶように移動すると、槍を持ったままの鬼を両断した。すべての砲撃を見事に躲し、武器も兵士も鬼も、迷うことなく細切れに切り裂く、次々と肉の破片が辺りを血の色と共に埋めて行く。

「まるで、ミンチ肉のように」

言いかけて、白が口をつぐんだ。自分の言葉が不謹慎に思えたからだ。

「パン粉と混ぜて、ハンバーグにしても、なんか、まずそうだな」

幸は平気な顔をして笑う。

「なよたけさん、こんなに強いのに」

「ん・・・」

「白、目を見開いて、向こうの血に染まってない地面を見つめてみる。黒い線がいくつもあるだろう」

」

「あります。焦げたみたいな」

「さっき落としておいた、監視衛星と軍事衛星。レーザー光を発射して宇宙から人を焼いてしまう。エネルギーの巨大無駄遣いってやつだ。これは人の技術だ、妙なことになったな」

返り血で血まみれになり、なよたけの姫は、一人、茫然と立ち尽くしていた。

幸と白はなよたけの姫の前に降り立つと、幸は抱いていた少女の首をなよたけの姫に手渡した。

「幸。この娘の名前はなんというのだろうか。わしは身を呈してわしを逃してくれたこの娘の名も知らぬ阿呆じゃ」

なよたけの姫は両腕に少女の首を抱くと、くずれるようにひざまづいた。

「痛かったろうに、怖かったろうに。助けてやれずにすまない」

幸は睨むようになよたけの姫を見つめていたが、小さく息を吐くと、思い詰めたように白を見つめた。

「白。母さんが神になって何処かに行ってしまうないように。しっかりとしがみついでいてくれ」

そう言うと、幸はなよたけの姫に優しく声をかけた。

「なよ姉さん。その娘を幸に渡してください」

顔を上げたなよたけの姫の両腕から、少女の首が浮かび上がり、幸は柔らかに少女の首を抱いた。

「幸・・・」

「この娘の魂魄はこの首にまだ残り、なよ姉さんに逃げてくれと叫んでいます。この娘にもう一度、生命を与えましょう」

幸の両腕が白く輝き出した。

白は幸の体が不意に軽くなったような気がした。慌てて、白は強く幸を抱き締め、幸の背中に顔を埋めた。

「母さん、何処にも行かないで」

白が大声で叫ぶ、なよたけの姫が気づいた。

「幸。お前、神か」

はっと、なよたけの姫は状況を理解すると、幸の両脚をしっかりと抱えた。

少女の体が幸の両腕の中で再生され、実体化して行く。

「母さん、母さん、何処にも行かないで。お願い、一緒にいて」

白が涙声で叫ぶ。

光が消え、幸はそのまま、力をなくし、地面に倒れ込む。なよたけの姫が慌てて、その体を支えた。

「なよ姉さん。この娘が目を覚ましたら、名前を尋ねてやってくれ」

幸が疲れた表情で笑う。

娘が幸の両腕の中ですやすやと眠っていた。

幸はしがみついたまま固まってしまった白に言った。

「白。ありがと・・・」

「おおい、母さあん」

黒の声が遠くに聞こえた。

やがて、黒と三毛が走ってやって来た。

「黒姉ちゃん」

白が泣きながら叫んだ。

「大丈夫か、白」

「うん」

黒の後ろで、三毛は茫然と血まみれの地面を見つめた。

「母さん、これは」

「明日はハンバーグだ。美味しいぞ」

三毛が大きくひとつ溜息をついて言う。

「だめです。一生、ハンバーグは食べられないかもしれません」

三毛が両手で口を覆った。

「ここがよくわかったな」

幸は笑うと、三毛の背中をさすりながら、辺りを見渡している黒に言った。

「走ってすぐだったよ。先生がぎゅっと白のこと、思っただけで走ったらすぐだよって、教えてくれたんだ」

「そうか。鴨居に結んだ白の髪の毛で道が繋がったのか。帰りはその道を辿ろう」

幸は緩やかに笑みを浮かべると、なよたけの姫に言った。

「なよ姉さん、風呂で洗いっこしよう。姉さんの顔、血糊や涙や鼻水で大変だ」

慌てて、なよたけの姫は袖でごしごしと顔を拭いた。

「ああ、そうしよう。遠慮はしないようにする」

幸はほっと安心して小さく笑うと、黒に言った。

「黒。なよたけ姉さんを背負ってくれ。三毛はその娘を頼むよ。体が馴染むまでまだ時間がかかるだろう」

「幸。この娘はわしが背負おう。そうしたいのだ」

幸はなよたけの姫の言葉に頷くと、ゆっくりと立ち上がった。

「黒、三毛。なよ姉さんが倒れそうになったら支えてくれ。白は先頭、道案内だ」

闇の中、男は一人、月明かりを頼りに台所で水を飲んでいて、家の中は、すっかり寝静まっている。

なよたけの姫まで、普通の女の子のように、大声で騒ぎながら、風呂を遊び場のように、幸達とはしゃぐ、その声が居間からでも聞こえていた、なよたけの姫の女の子っぽい笑い声にあかねが

目を丸くして驚いていたのを男は思い起こす。

「千年の重荷を降ろしたということか」

ふと影が動いた。なよたけの姫だ。

なよたけの姫は、テーブルを挟み、男の前に座った。顔が影になり、細かな表情が伺えない。

「あ、あのな・・・」

なよたけの姫が言葉を選ぶように言う。

「どうぞ」

男が促した。

「幸が言うのだ。わしは幸の姉だ、だから、お前を・・・、お前を父さんと呼んで欲しいとな」
思いもしなかったなよたけの姫の言葉に、男は小声で愉快そうに笑った。

「驚きました」

「だ、だめか・・・」

「いいえ、光栄の至りです。こちらこそ、どうぞ、よろしく」

安心したように、なよたけの姫は息を漏らした。

「それなら、彼女はなよたけさんの娘ということでいいですか。なよたけさんの一番の気掛かりは彼女のこれからでしょう」

「もうひとつある」

「亡くなった人達のことですね」

男が呟くように言った。

「わしも、人の心が声に出して言っているようにわかる。だから聞こえるのだ。魂魄はあの地にそのまま残り、いまも悲鳴をあげ続けている。わしはその魂を鎮めてやらねばならん」

男は優しくなよたけの姫を見つめると、心配げに言った。

「なよ。父さんはお前の心と体が心配だよ。とても、疲れているのがわかるからね」

「でも、お父さん。なよは忘れることができないんだもの」

我慢し切れず、なよたけの姫が小さく笑った。

「我ながらつまらぬ小芝居を、緊張感がだいなしじゃ」

なよたけの姫は大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。

「ここはいいな。この家に繋がった異界は、和やかで、わしの気持ちも、落ち着く。なあ、わしは深刻ぶって身を削ろうというのではない。国の責任者としてけじめをつける、ただ、当然のことをするだけじゃ」

足音がした。

幸は少し寝ぼけたふうに、なよたけの姫の隣に座った。

「幸も行くよ。じゃないとなよ姉さん、国に入れないもの」

「そう言えば、国を出る時、なにやら、結界を巡らしておったな」

「レアメタルは新たな戦争を引き起こす元になるから、簡単には入れないようにしたんだ」

そう言いながらも、眠いのだろう、幸がなよたけの姫の肩に体を預ける。

「疲れさせてしまったな。さあ、幸、寝に行こう。起こして悪かったな」

なよたけの姫は幸を支え、ゆっくりと立ち上がった。

「父さんも寝ろ。宵っばりは体に毒じゃ」

「お休み。もうすぐ寝るよ」

男はなよたけの姫が幸に肩を貸し、寝間に行くのを見送る。

そう言えばと男は黒がはしゃいでいたのを思い出した。

かあさんとなよ姉さんの間に寝るのは、世界で一番安全なところで寝るのと同じだよだとか。

男はふと自分がいなくなった後も、なよたけの姫が居てくれれば安心だと思った。

男は、夕刻、茶店の窓際の席に座っていた。

珈琲をテーブルに戻し、行き交う人を眺める。

街中、まだ、日差しは残り、夕食の材料だろうか、買い物帰りらしい女性が多い。

男は会計事務所の勤めからの帰り、待ち合わせにと茶店に寄ったのだった。

幸せすぎて申し訳ない、思わず、男の口から小さく言葉が漏れた。

「よう、久しぶりだな。寺で閉じ込められて以来だ」

男がゆっくりと顔を上げた。

「どちら様でしょうか。お人違いではありませんか」

男が興味無さそうに言う。

愚円は男の前、斜すに座ると、テーブルに右肘を載せ笑った。（短編小説『異形流堰迷子は天へと落ちていく』四話より）

「冷たいなあ、昔の仲間によ」

男は、溜息をつくと静かに言った。

「あんたと仲間だった記憶はない。だが、仕事を邪魔された記憶ならある」

男は残った珈琲を飲むと言った。

「私は待ち合わせでね。ここで人を待っているんだ。邪魔しないでくれるかな」

「なんだ、儲け話か。なら、俺にも小遣い稼ぎさせてくれよ」

「いや、娘と待ち合わせだ」

一瞬、愚円の顔が引きつった。

「幸とか言ったな」

「あんたの口から、娘の名が出るのは、なんだか汚されたようでいやだな。まあ、幸は四女で、これから来るのは次女だ」

愚円はほっと息を漏らしたが、おそろおそろと尋ねた。

「同じばけものか」

「私の娘達をばけもの呼ばわりするな。みんな、可愛くて優しい女の子だ。さっきもね、思っていたんだ。・・・こんな私が、良い娘たちに恵まれてさ、申し訳ないくらいだってね」

「あの神殺しの魔術師とも言われた無がこんな冴えないおっさんになってしまうとはな」

男は小さく笑った。

「褒めてくれてありがとう」

男は初めて愚円の姿を直視した。

「仕立ての良いスーツ。こざっぱりとした様子じゃないか。ちょっとしたやり手のビジネスマンだな」

「垢だらけでは女にモテないからな。それに金もある、遊ばないという選択肢を選ぶ理由はない

だろう」

「坊主を辞めたのか」

「いや、館長直々の命令だ。人探し、いや、鬼探しだ」

愚円は顔を寄せると、小声で囁いた。

「この辺りでかぐやのなよたけの姫を見たという情報がある。随分と前だがな」

「鬼の女王か。探しているのか」

「賞金が出ている。一生、遊んで暮らせる金額だ。だが、俺はそんな金には関心がない。それだけの金を出そうということ自体に関心がある。考えられないような金が裏で動いているはずだ」

「なるほど、敏腕のビジネスマンだ」

「あんたも一口乗らないか」

「冴えないおっさんだからな、遠慮しておくよ。私はそんなことよりも、今晚の晩御飯の方が関心あるんだ。だしの効いた茄子のつゆびだしが食いたいとかさ」

愚円が哀れむような顔で男を眺めた。

「ここまで落ちてしまうとはな、あの無が」

こんこんと硝子を叩く音がした。なよたけの姫と黒が笑みを浮かべ、手を振っている。男は入り口を指さすと、にっと笑みを返した。

「愚円。手を引け、怪我するだけだ」

いきなりの男の言葉に愚円は男の真意を計りかねた。

「父さん、待たせたな」

「たいして待っていないよ」

男が笑った。

「その男、誰じゃ」

「古い知り合い。とっても悪い奴だから、喋っちゃだめだよ。さあ、帰ろうか。ん、黒がいないな」

「あそこじゃ」

なよたけの姫が指さす入り口、ショーウインドにケーキが売られており、ぼおっと黒が幸せそうに見つめていた。

「アップルパイが欲しいらしい。なあ、父さん、初めての給料は父さんのものを買うつもりじゃったが・・・、アップルパイ買っても良いかのう」

「なよが佳奈さんちでアルバイトしたお金だ、父さんのことよりも自分が買いたいことに使いなさい、ついでに言うと、父さんもアップルパイ、好きだからさ。みんなで食べたなら楽しいな」

「ならば、そうしよう」

にかっとなよたけの姫は笑みを浮かべると、黒のところへと歩き出す。呼吸困難のように口をぱくぱくさせていた愚円がやっと意識を取り戻した。

「俺が館長から探索を仰せつかったのは、かぐやのなよたけの姫の顔を知っているのが俺と館長

だけだったからだ。なんで、かぐやのなよたけの姫があんたの娘なんだ」

「うーん、他人の空似かな」

男が気楽そうに答えた。

「多分、お前の情報も、うちの娘を見間違えたんだらう、削除しておいてくれ」

男は明細を持ち、立ち上がるとレジへ向かった。

にこおっと黒が満面の笑みを浮かべる。

店の外、黒はしっかりとアップルパイ、ホールで二つ、箱を抱えていた。

「先生、ありがとう」

「ん、買ったのは、なよだよ」

「なよ姉さん、先生にお礼を言えって。先生の新しい財布がアップルパイになったんだからって」

「そうか、それは、どういたしまして」

男は笑うと、なよたけの姫に言った。

「さすがのなよも黒には甘いなあ」

「性根が腐らん程度には甘やかしてやるわ、一応、こいつはわしの命の恩人じゃからな。それに、こいつが声をかけなんたら、小夜乃も生き返ることはできんかった」

ふっとなよたけの姫は笑みを消した。

男はなよたけの姫が小夜乃を連れ帰った次の朝、小夜乃を抱きかかえ、助けてくれてありがとうと真っすぐに言ったこと、そして、小夜乃に国の責任者として民を守れなかったのを謝ったことを思い出した。

小夜乃はなよたけの姫にしがみついて泣いていた、いつまでも。

「あ、黒。なよ姉さんにアップルパイを買ってもらった」

あさぎの横で、夕食にと茄子を切っていた幸が声を上げた。

「黒はなあ、本当に」

幸は手を止めて、溜息をついた。

「ごめんなさい、母さん。黒姉ちゃん、悪気はないんです」

白が慌てて黒をかばった。

白は棚からお皿を出していたが、手を止めると、そっと幸に言った。

「ここに来るまで、本家では、食べるもの、あまりもらえなくて、黒姉ちゃんが、あたしたちに食べさせようと、いつも・・・」

幸は包丁を離すと、ぎゅっと白を抱き締めた。

「良い姉さんだな」

「うん」

白が堪えるように小さく呟いた。

あさぎが棚からティーカップを出す。

「夕食の後はアップルパイ、紅茶の用意、しておくね」

「あさぎ姉さん、しょうがないから、黒にはちょっと多めに取り分けてやろう」

「うん、しょうがない、しょうがない」

あさぎが楽しそうに笑みを浮かべる。

「あ、でも、そうしたら、黒は白や三毛に、自分の分も食べろっていうかもしれない」

ふと、あさぎが呟いた。

困ったように、白は笑みを浮かべると、首を横に振って言った。

「あさぎ姉さん。それは絶対ないと思う」

くすぐったそうにあさぎが笑った。

幸はもう一度、茄子を切り始めたが、思い出したように言った。

「そういえば、三毛はまだ戻らないのかな」

「小夜乃ちゃんと散歩するって、出たきりだね。あかねちゃんも一緒かな」

あさぎが答えた。

「あさぎ姉さん」

「ん」

「体操をね、小夜乃ちゃんに教えてやってほしいんだ。いいかな」

「うん、教えるよ」

「ね、そのうち、この体操はダイエットと美容の体操ですって売り出そうか。儲かるかもしれない」

「本が百万部突破、DVDもつくらなきゃね」

幸の言葉に、あさぎが笑った。

川上を夕日が沈んで行く。

三人がそれを静かに眺めていた。

並んで座る影、静寂を遮るようにあかねが言った。

「綺麗な色ですね」

「太陽は燃え尽きて死んでしまうけど、朝にはまた甦り、世界を照らす。だから、朝の太陽は生まれたばかりの元気な赤ん坊なんだよ」

小夜乃が小さく呟いた。

「それは」

三毛が小夜乃の言葉を促した。

「かぐやのなよたけの姫様の言葉です」

ふと、三毛は小夜乃の手を握ると呟いた。

「ごめんなさい、とっても怖い人だと思っていたんだ」

小夜乃はそっと笑みを浮かべた。

「とっても怖いけど、とってもとっても優しい人なんです」

くしゅん、なよたけの姫がくしゃみをした。

「なよ姉さん、それは噂くしゃみだよ」

両手にアップルパイの箱を抱え、黒が笑った。辺りは少しずつ、夜の気配を現し、三人は家路へと急ぐ。

「ならば、誰かが、わしを褒めてくれてるのだろう」

黒が楽しそうに笑った。

「きっと、良い人だってっているんだ」

「さてな。わしはそんなには良い奴ではないからな」

なよたけの姫はふっと顔を曇らせたが、気持ちを切り替えるように笑った。

「黒。お前はわしが恐くないのか」

「怒鳴られたら泣いてしまうかもしれないけど、でも、恐くない。啓子さんも、なよ姉さん、恐くなくなったって言ってた。とっても可愛い女の子だって言ってたよ」

「あやつはなめておるのお。まあ、良い、それもあやつの良いところじゃ」

「なにはともあれ」

なよたけの姫が顔をぐっと上げた。

「かしずかれるより、対等に喋るのは随分と楽しいものじゃな」

「無の野郎。何が娘だ」

ホテルの一室。愚円は女がシャワーを浴びている間、ベッドの上で歯噛みをしていた。

このまま、尻尾巻いて逃げ出せるはずがない、お宝が目の前に転がっているのに、手ぶらで帰れるか。

しかし・・・、流石にあの三人を相手に勝ち目はない。

そういや、なんで、かぐやのなよたけの姫にあんな賞金が付いているんだ、それに、いま、奴の国は結界が張ってあり、誰も入れない、もちろん、鬼の奴らもだ。そもそも、人と鬼の連合軍が、なんで、あんなに田舎の国を攻める必要がある。

このからくりの裏を解いて行く方が、儲けに近いかもしれん。どうせ、あいつら三人に勝てるような奴はいないからな。

出し抜かれる心配はないだろう。

不意に、シャワーの音が止まった。

「母さん。なよ姉さんにアップルパイ買ってもらったよ」

家の前で少しは叱ってやろうかと、黒を待ち構えていた幸だったが、黒のなんの戸惑いのない、その声に半分呆れ、笑みを浮かべた。

「良かったな、黒」

ぐりぐりと拳で黒の頭をなでる。

「もお、母さん、痛いよ」

「ごめん、ごめん。さあ、アップルパイは冷蔵庫だ」

「うん」

黒がぱたぱたと家に駆け込んで行く。

「黒にはかなわないな」

男が笑った。

幸も笑うとなよたけの姫に言った。

「なよ姉さん、お疲れさま。折角の給料がアップルパイになってしまったね」

「給料は余禄じゃ。わしは佳奈のところへ遊びに行っているようなものじゃからな」

「でも、佳奈姉さん、喜んでいたよ。売上が上がったって」

なよたけの姫がにっと笑った。

「売り子は面白いのお。国を治めるのと似ておる」

「話はあとあと。さあ、家に入ろう」

男は二人を促すと家に入った。

「あ」

小夜乃は小さく呟くと、よろめきながら、なよたけの姫の元へ走り、その前で正座した。

「お帰りなさいませ、姫様」

「ただいま。しかし、ここではその姫様はやめてくれ。妙に照れるからな」

なよたけの姫は小夜乃の前に座ると、右手を差し出した。

「わしの手を両手でぎゅっと握ってみい」

「は、はい」

ううっと唸りながら小夜乃が両手でなよたけの姫の右手を強く握る。

「よしよし。随分、力が戻ってきたな」

小夜乃は手を離すと、嬉しそうに笑った。

「さて、晩ご飯の用意もできておりそうじゃ。食卓を出すかな」

なよたけの姫が折り畳みのテーブルを廊下から運ぶ、あたふたと小夜乃がそれを手伝った。三毛とあかねがもう一つ、テーブルを出し、並べる。これで九人が座ることができる。

満面の笑顔のまま、黒が折り畳みの椅子を運んで来た、白も折り畳み椅子を両手に運ぶ。

「黒さん、嬉しそう」

「小夜乃ちゃん、晩ご飯の後はアップルパイだよ」

黒は椅子を降ろし、小夜乃を抱き締めると、うふふっと笑う。

「黒姉ちゃん、涎が出てるよ」

白が見とがめて言った。

「黒姉ちゃんは幸母さんの御陽気なところばかり似ています」

白が大袈裟に溜息をついた。白は意識して幸を母さんと呼ばずに幸母さんと呼ぶようにしていた

。黒は笑うと、小夜乃から離れ、椅子を並べる。

「何を言われても怒らないよお。御陽気母さんに似ているって言われても」

黒が鼻歌交じりに答える。

「ジャガイモと茄子と玉葱のお味噌汁です」

三毛が鍋を抱えて台所からやって来た。よいしょっとテーブルに鍋を置く。

「やったー、いっぱい食べるよ」

「黒姉ちゃん、アップルパイを食べるなら、ちょっと、控えめの方がいいよ」

「ええっ、三毛は厳しいなあ。入るところが違うから大丈夫だよ」

「別腹ってやつですね。黒姉ちゃんは本当に胃が二つあるかもしれない。一度、母さんに診てもらった方がいいよ。でも・・・、太るかもしれないけど、アップルパイは楽しみです」

三毛は笑うと黒に頷いた。

「黒さん、ほどほどですよ。黒さん、少し動きが鈍くなっています」

「は、はいっ」

あかねがおひつを抱え、直立不動になった黒を少し睨んだ。

三毛が不思議そうに二人を見る、あかねがちょっと舌を出して、三毛に笑いかけた。

「よいしょっと」

男が野菜炒めいっぱいの大皿を抱えて持って来た、やっとのことで、テーブルに置く。

「いろんなのが入っておるのお」

なよたけの姫が驚いて覗き込んだ。

「美味しいですよ」

あさぎがお茶の入ったやかんを片手に笑った。

「いま収穫できる野菜はもちろん、ハーブや食べられる草まで入っています。味付けはちょっと中華風です、自家製ベーコンも入っていて旨みは充分ですよ」

「なるほどのお、あさぎの作ってくれるものは旨くていい。早く食べよう」

食卓では必ず黒は真ん中に座る。両方の大皿からおかずを取るためだ。

頂きます、元気よく黒は言うると本当に嬉しくてたまらないと笑顔で晩ご飯を食べる。

あさぎが黒を見て、幸せそうに笑った。

「黒ちゃんは本当に嬉しそうに食べてくれるね、作りがいがあるよ」

「あさぎ姉さん、とっても美味しいよ」

「ありがと」

黒はにひひと幸のおどけた時とそっくりの笑みを浮かべた。幸はふと、立ち上がると、硝子戸を開け、代わりに網戸を閉める、涼しい風がそっと入ってくる。そして振り返る、楽しいなと小さく呟いた。

深夜、男が部屋の明かりを消そうとした時、襖の向こうからなよたけの姫の声が聞こえた。

「入っても良いか」

「どうぞ」

男が答えると、襖が開き、なよたけの姫が入ってきた。

男は椅子に座ったまま、少し顔を上げ、笑みを浮かべた。

「どうしました、なよ」

なよたけの姫が緊張した面持ちで呟いた。

「わしはここを出て行く」

「夕方の、あの破壊坊主の頭の中、読んだんだね」

男は溜息をつく、俯いた。

「小夜乃だけは、これからも、ここで暮らさせてもらえないか」

かすかに、なよたけの姫の言葉が震えた。

「小夜乃ちゃんは、なよがないとだめになってしまうよ。それに」

ふっと、男が顔を上げた。

「大事な娘をほうりだすなんてことは、父親として出来ないな」

男は右手で、なよたけの姫の手を力強く握った。

「家族ってなんだろうと思うことがある。ここには、いわゆる血の繋がりと意味での親子は存在しない。でも、ここでは血の繋がりよりも強い、思いの繋がりで親子が成り立っている。父さんはなよを娘と認めた。だから、どんな奴からみなよを守るよ」

男はじっと、なよを見つめたが、ふと襖に目をやった。

あたふたと、幸が部屋に飛び込んできた。

「なよ姉ちゃん。幸も戦うよ、だから、ここで一緒に暮らそう」

なよたけの姫が小さく溜息をついた。

「似た者親子じゃなあ」

なよたけの姫のもう片方の手を幸は両手でぎゅっと握ると、嬉しそうに笑った。

「なよ姉ちゃんも、随分と、お人好しだ。だから、似た者親子の似た者姉妹だよ」

「わかった」

なよたけの姫は呆れたように言うと、二人の手を解いた。

皆が寝静まった夜中、なよたけの姫は屋根の上に座り、月を眺めていた。

ゆっくりと雨戸が開く、あさぎがつかかけを履き、外へ出てきた。そして、辺りを見渡し、それから、空を見上げる。

やっと、なよたけの姫に気づいたのだろう、笑みを浮かべると、自分を指さし、そして、なよたけの姫の横を指さした。

なよたけの姫は絹の紐を飛ばし、釣り上げるように、あさぎを持ち上げ、自分の横に座らせた。

「ごめんなさい、なよ姉さんがいないし、雨戸が少し開いていたから気になって」

なよたけの姫は少し笑うとあさぎの頭をなでた。

「ただの月見じゃ、心配するな」

「なよ姉さん、悩みはうまく解決したようですね」

「ん、どうしてわかった」

「なよ姉さん、晩ご飯の時、ふっと暗い顔をしていたのが、今は表情が柔らかいから」

なよたけの姫は困ったように笑みを浮かべた。

「表情に出ておったか。心配かけたのお」

くすぐったそうに、あさぎも笑みを浮かべる。

「父さんに相談した、改めて、わしは、なんて言うかな、自分の居場所を見つけた気がする」

「それはあさぎも同じです」

あさぎはなよたけの姫に腕をからめ、かすかに俯いた。

「助けてもらえなかったら、消えてしまうところでした。今は皆がいてくれて、とても楽しい。

もしも、消えていたらと思うと胸がぎゅっと苦しくなります」

「お互い良かったな」

なよたけの姫の言葉にあさぎはそっと頷いた。

なよたけの姫は永く思い出すことのなかった、幼少の頃をふと思い出した。

「そんな時代もあったな」

小さく呟く。あさぎはその声に顔を上げた。

なよたけの姫は笑みを浮かべるとあさぎに言った。

「もう寝よう。夏とはいえ、風邪をひいてしまうぞ」